

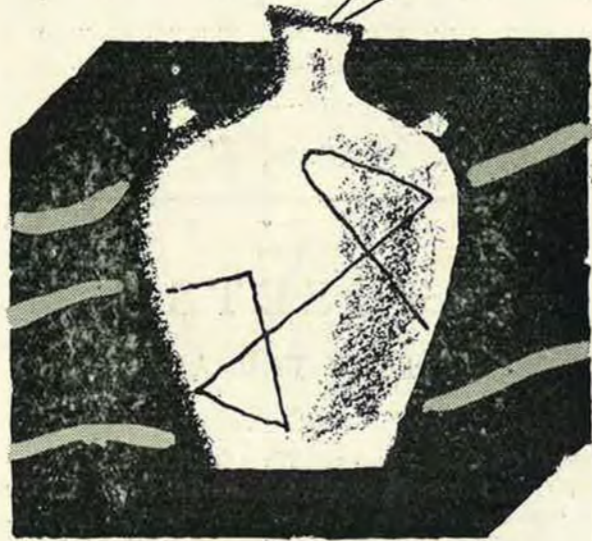
陶 說

日本陶磁協会誌



創 刊 号

和光の
工芸品



和光

銀座四丁目角
電話京橋(56)代表8451番

(毎日曜日休業)

東洋古美術



壺中居

東京都中央区日本橋通三ノ一
電話千代田(27)1836番

度々博物館を訪れる人なら、いつか一度は博物館の藏品であるこの壺を目にした筈だ。また一度でも見た以上は必ず記憶に残っている筈だ。この図版を「見ただけで「これ、これ」と会心の笑を浮べる人もあろう。それ程、この壺は人を惹きつけるサムシングを持っている。この壺の絶讃者であつた大阪の某氏は「東京から帰りの車中で、あの壺のことを思い出すといつも後髪を引かれる思いがする」と云つていた。ポツテリとした脂肪のような釉は白くはなく、寧ろ汚いと云つてもよい程古色を帯び、呉須の色も冴えてはいないが、これが却つて地紙の煤けた古い水墨画のような文雅な趣を呈している。宜徳の官窯ものには西域風のエキゾチックな図柄のものが多く、これらに対し、民窯ものと思われるこの壺は中国の風土と漢民族の中で育つた伝統的なものを代表している逸品だ。

宜徳染付魚藻文壺 (高六寸五分)

題字	小林古徑先生
カット	日根野作三先生 富本憲吉先生 加藤土師崩先生
原色版	一 図
写真版	九 図

発刊の辞	梅澤彦太郎	(1)
成化の陶磁	久志卓真	(2)
「仁清記年銘物」への一追求	保田憲三	(6)
「志野織部黄瀬戸展」を顧みて	小森松庵	(10)
陶説について	尾崎洵盛	(13)
見聞雑記	満岡忠成	(17)
平戸橋の陶茶	本多静雄	(22)
陶器の句	小村塘雨	(23)
小林逸翁の帰朝歓迎茶会	田山方南	(24)
古陶心	山田詰	(25)

随筆、茶会記、支部だより、会員名簿等

The
TOSETSU
CONTENTS FOR APRIL, 1953

PLATES

- Frontispiece (in color) : Blue and White Jar. Hsüan-tê.
 1. Nezumi (Gray)-Shino Te:-Bowl. 2. Shino Tea-Bowl. 3. Ch'êng-Hua Vase in Red and "Pea-Green" Glaze. 4. Ch'êng-Hua "Wu-Tsai (Polychrome Enamelled)" Jar. 5. Ch'êng-Hua Blue and White Jar. 6. Ch'êng-Hua Blue and White Jar. 7. Reign Mark of Same. 8. Ki (Yellow)-Seto Bowl with Cover. 9. Oribe Handled Ewer.

FOREWORD

On Issuing the First Number of the "Tosetsu". By Hikotaro Umezawa
 Chairman, Japan Ceramic Society.

LEADING ARTICLES

Ch'êng-Hua Period Wares.	By Takushin Kushi	2
A Research into Dated Works by Ninsei.	By Kenzo Yasuda	6
On the "T'ac-Shuo", written by Chu-Yen.	By Ayamori Ozaki	13

MISCELLANEA

"Haiku"-Poems and Ceramics.	By Tou Komura	23
Chanoyu-Party Given in Honor of Mr. Ichizo Kobayashi's Return from a World Tour.	By Honan Tayama	24
Ceramic Glossary (1).	Compiled by the Editorial Staff	6

ETC.



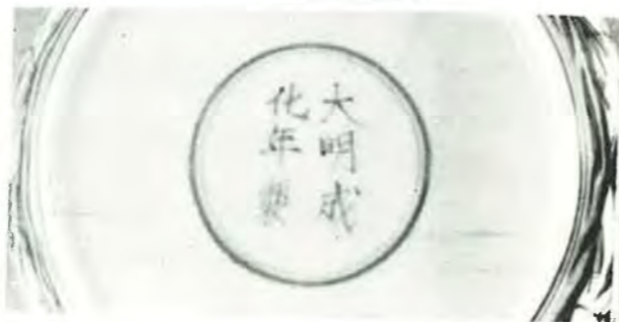
1 鼠志野繪垣 茶碗



2 志野茶碗 繪垣



5 成化銘染附蓮池文 壺



7 成化銘染附草花
文壺高台裏銘



6

成化銘染附草花文



3 成化銘豆彩唐草文 梅 瓶



4

成化銘五彩牡丹文 壺



8 黄瀬戸菊つまみ 蓋 向 附



9 織 部 水 注

創刊の辞

日本陶磁協会理事長

梅澤彦太郎

日本陶磁協会が、吾国に於ける陶磁研究の中枢的指導機關として、かつは全国愛陶家の集中的連絡機關として、謂わば一部好事家のグループに過ぎなかつた古い殻を脱ぎ捨て、陶磁に関心を持つすべての人々を網羅する大衆的団体として成長すべく、社団法人に改組再発足してから既に滿三カ年の日子が経過しました。この間に吾々は、春秋二季の大会、数次の公開展示会、月例研究会開催の他、図録の出版、更に全国十五カ所に亘る地方支部の設置等、大体所期のプラン、事業を遂行して鋭意本協会の發展に努力して参りました。その結果会員数も逐年増加して、本協会の存在と活動とは漸く一般にも認識されるに至りましたが、今日まで専属の機関誌を持たなかつたということは、何んと云つても些か物足りなく、龍 描いて睛を欠く憾みがあつたばかりでなく、事業の推進上にも宣傳上にも不便を忍ばねばならない場合が屢々であつたところ、今回漸く熟して茲に本誌を創刊する運びとなりましたことは、実に御同慶の至りと存じます。殊に本誌の創刊が、多数会員の熱望であり、特に地方支部から熱烈な支持が寄せられているということは、本誌の幸先のため大変心強いことでもあります。

然しながら、この種の専門的な趣味の定期刊行物は、一般の新聞雑誌の類と異り、御承知の如く印刷に多額の経費を要する割には發行部数が限定されるため経営が非常にむつかしく、短いものでは二、三カ月長いものでも一年足らずで廢刊の憂目を見るところというのが従來の例となつております。固より本誌は市販の趣味雑誌と異り本協会の機関誌でありますから、創刊した以上は協会が存続するかぎり續刊する信念の下に事に当らなければならぬのであります。趣味に関する定期刊行物は温室で栽培する高級な草花と同様で、野放しでは決して育たないのであります。本誌が何処へ出しても恥しくないだけの体裁と充実した内容を備え、歐米の僚誌と交換して遜色のないものになるには、本誌に対する会員諸君の吾子を手塩にかけて育てあげるにも等しい愛情と庇護とに俟たなければなりません。

成化の陶磁

久志卓眞

成化の陶磁は古來明磁の粹として傳承されて來てゐるのであるが、われわれはそれらしきものを近年まで認識することが出来なかつたのである。

先に「支那明初陶磁図鑑」を著するに當つて、成化のはつきりした輪郭を出すにはそれに続く弘治、正徳のはつきりした官窯の典型的なものを吟味検討することによつて、その動かすべからざる線を把握しようとするにあつた。

私は弘治の官窯として最も確實なものと思はれる弘治銘の龍文皿を買い、徹底的にその時代の技法、描法、磁質を極めることによつて、その時代の官窯陶磁のあるべき線を把握し、故山本發次郎氏の持たれた成化銘の唐草文鉢が真正の成化の染付作品であることを鑑し、現在小林古徑氏藏の成化豆彩唐草文梅瓶（口絵参照）を真物と認定したにとどまるのであつた。古徑氏藏のものは未だ古徑氏藏ではなく写真を撮る機会に恵まれず、写真を示すことが出来ず、文書にその名を挙げ真物たることを主張したに過ぎない。それから十年の日月はたつたが、昭和二十五年まで成化の官窯として認定するに足るものは、唯一つ尾崎洵盛氏の持つていられる染付靈芝蘭花小碟を発見したに過ぎなかつた。

私はもう成化の官窯の発見は出来ないのではないかと断念し、さうになつていたとき、二十五年の春、不言堂の坂本君が三州の岡崎在で成化官窯の染附の典型的名品ともいふべき蓮池文壺（口絵参照）を

見つけて來て、現在私の持つてゐる吉州窯青磁印花文の皿と共に瀨山龍泉堂に賣り渡したのであつた。早速私はそれを見て成化開闢いなしと認定し「茶わん」第二百十六号（八月号）の表紙に原色版で出し、図版解説で成化銘水草模様壺の名称の下に、日本に在る成化銘の官窯染附の代表的なものとして折紙をつけたのであつた。そしてこれが雍正、康熙の写しでないことを極力主張したのであつた。今ではこれを誰も躊躇する人もなく、本場に日本に於ける成化の代表的なものとして信ずるところまで來たけれども、当時としてはそれを真物と断言出来る人は稀なのであつた。勿論それを真物と鑑するのにはそれだけの教養と涵養とセンスが必要なのはいうまでもない。私は私の図録などで研究して実物を見ないで、この壺を成化と感づいた坂本君の異常なセンスに敬意を表する。又これを相当高価に購つて坂本君の発見を認めた龍泉堂の諸君の度量にも敬意を表する。然しこの場合、この名品を康熙、雍正の写しと鑑して取り上げなかつたとするならば、この名品は埋れて、われわれの目に触れないで葬られてしまつたかも知れない。近頃時に頑冥な頭の古い商人があつて、従來見たことのないものであると、何んでも偽物といつて葬り去ることを平気でやつてゐる者があるが、大いに警戒する必要がある。驚くべき名品といふのは従來の目利きと稱する商人の眼界から遙か離れて現われるといふことを知るべきである。

この蓮池文壺が何等障害なく陶磁界の第一線に出て成化染附の研究に一大光明を与えたといふのは、発見した者、買つた者、紹介した者、三者共に一丸となつて、この壺の価値の宣揚に努力したからである、然しこの場合、何れかが未熟な我見を出して、疑問を懐き葬るようなことがあれば、この壺は不遇に葬り去られるばかりでなく、日本の陶磁研究はこの点に於て大事な一步を踏み出すことが出来なくなることを知らねばならない。この点からして、私は一流商

人の研究者らしい鑑識眼を誇ることを控えて貰い、買えないものでも貴い真物のあることを意識して貰いたい。又收藏家も一流商人に賣れないものでも百に一つは真物のあることを意識して貰いたい。偽物を真物と鑑することは時が来れば是正されるが、真物を偽物と鑑した以上、それは粗末に扱われて破損し亡失してしまう恐れがある。それは実例が沢山ある。私はこの壺が何の故障もなく真に成化の典型的な名品として今日に至つたことを奉ぐと同時に、この世界に決定的な威力を持つ一流商人の自重と、研究者の進んだ大胆なる判定を望むものである。

少し余談に互つた嫌いはあるが、これが官徳官窯染附などの類品の多い物の場合ならこれ程強調する必要はないのであるが、世界にも稀な成化の官窯染附の場合であつたから、特に力を入れなければならなかつたのである。

この蓮池文壺の「茶わん」に原色版で表紙に載つたのが機縁で、今私の持つてゐる成化銘草花文壺（口絵参照）が出て來た。それは「茶わん」の表紙を見てそれに似た形の成化銘の壺があるのを気付いた人が龍泉堂に賣りに來たことによるのである。友を呼ぶといふのか、世界にも稀な成化の典型的な染附壺が、半年もたたぬうちに二つも出るといふ奇現象が昭和二十五年に生じたわけである。その年の暮私は或る古い支那古陶磁専門の店で成化官窯赤絵に間違いない牡丹唐草文の壺（口絵参照）を得たが、その後二年以上を経るけれども成化の官窯のはつきりしたものなど一つとして見ていない。

以下成化の官窯赤絵、染附、又は成化の官窯の実質を十分表示するに足る正徳又は弘治の官窯作品、又成化の模様を最も忠実に示すと思われる万曆、康熙、雍正官窯の成化写しを説き、終に成化の銘ある三彩の水盃を説き、成化の陶磁の大体の輪廓らしきものを示すことにしよう。と思つたのであるが、先づ成化の陶磁に対して支那の文献が如何なる記述を残したかを吟味してみよう。万曆時代の文獻、宗濬の著「蓬生八踐」の「燕間清賞」の中に「成窯の上品は五彩の葡萄（文様）盤口（外へ反る口）扁肚の醜杯（把杯即ち馬上杯）に過ぐるものなし。或は宣杯（宣徳の杯）に較ぶるに妙甚し。次に若草、虫を口にするところの子母雞（文様）の勸杯（賭酒の杯）人

物蓮子酒盞、五供養（五個一揃の佛器）の浅盞、草虫小琖、青花紙薄（極薄）酒琖五彩齊（齋）ちよ（箸）小碟（皿）、香盒、各製小罐、皆精妙、余が意に入る可し。青花成窯成化窯宣窯（宣德窯）に及ばず。五彩宣廟（宣德朝）憲廟（成化朝）に如かず。宣窯の青乃ち蘇浮泥青（西亜細亜輸入の純良な酸化コバルト）なり。後俱用い尽きて成窯に至る時、皆平等（普通）の青（酸化コバルト）なり。宣窯五彩深厚堆垛、故に甚佳ならず。而して成窯五彩色浅淡を用ゆ。頗る画意有り、此の余が評確然と允たるに似たるや。」とあるが、この前半は「陶説」の成化窯の「博物要覧」の文として挙げたもののオリヂンのような気がする。「博物要覧」の原文を知らないのはつきりしたことは申されないであつて、同じ万曆の文獻「博物要覧」が「選生八踐」の影響を受けたものやら、「選生八踐」が「博物要覧」の影響を受けたものやら、それも解らず、「博物要覧」を挙げたと称する「陶説」の文も「博物要覧」の文を忠実に挙げたともし思われぬ。兎に角「陶説」の引用した文は「選生八踐」の原文とは幾分抄略されたものとなつてゐる。「選生八踐」の「皆精妙可人意」の文は恐らく「皆精妙可人意」であつたに相違なく、この人と人と誤刻されたのは、景徳鎮陶録の成窯の頃でも「文房肆攷」の成化窯の項と同じく「皆精妙可人」となつて、なんとも意味の解らぬものとなつてゐる。

要するに「選生八踐」の「燕間清賞」の成窯に関する文は、同じ万曆時代の項墨林の「歴代名瓷図譜」の文人趣味の観点からの鑑賞を意味するものであつて、成化の文雅な小品の傑作を高揚するに過ぎない。広い意味の成化窯というものは、もつと別な意味も持つものである。「五彩蒲萄斝口扁肚把杯」は「歴代名瓷図譜」に図示するものであつて、その項墨林の説明を見ると略々その輪郭は察することが出来る。この把杯は陶説でも、文房肆攷でも、景徳鎮陶録で

も把杯と書するが、把はたづな、轡革を意味し、不適当でないかと思ふ。把はつか、さじのえ（枋）を意味し、把と同じ意味で、原文らしい特色と窺うことが出来る。

以上挙げた「選生八踐」の「燕間清賞」の文の下半の初め「青花成窯宣窯に及ばず。五彩宣廟憲廟に如かず。」は、万曆時代既に染附の成化窯は、染附の宣徳に及ばない、赤絵の宣徳窯は赤絵の成化窯に及ばないといつてゐるのであつて、誠に穿つた適切な言を述べているといえよう。この原則は今でも狂わないのであつて、宣徳は染付、成化は赤絵と強調せざるを得ないのである。ところがその最も特色ある素晴らしい成化赤絵といふのは殆ど見ることが出来ず、私の認識の範囲では古徑先生のものと私のもの二点より見ていないのである。これでは如何に成化赤絵を云々しても甚心もとなんといえよう。それにしても二つでも真物を見ることが出来たのは幸といわねばならない。勿論民窯の成化赤絵らしきものは相当見ているけれども、さてどれが最も著しい成化赤絵の特色を示すものであるかといふことにすると、「支那明初陶磁図鑑」に挙げた陳守貴造銘の唐草文鉢でも挙げるより外方法はない。その多くは成化、弘治、正徳の間のものでより推定出来ないものである。

今の文に次ぐ「宣窯の青乃ち蘇浮泥青なり、後俱用ひ尽きて、成窯に至る時、皆平等の青なり。」は宣徳官窯の青花即ち染附は西亜細亜輸入の純良な呉須（酸化コバルト）を用いるが、その純良な呉須は漸次使用し尽されて、成化の時代になると普通の呉須より用いられなくなつた事を意味する。これは原則的には承認出来るが、例外もあつて、必ずしもそうとはいへない。これは原則的である。黄地染附の高台裏の露胎の大明成化年製の文字銘を側面に書する大皿で宣徳の純良な呉須（コバルト）を用いてゐるものを見ているのであつて、成化に西亜細亜輸入の純良な呉須が盡きたといふことはいえないのである。

る。勿論その宣徳の純良な呉須が景泰七宝で殆ど使用し盡され、残り少くなり、珍重されたことは認める。と同時に成化となつて濃艶な宣徳染附と異つた淡い又淡い染附の好尚の生じて来たことも疑ふ余地のないことであつて、成化の染附の色は宣徳呉須の不足を意味するよりも染附の好尚の時代的变化を物語ると見た方がよいのではなからうか。それは正徳の官窯染附でも第一流の最高のもは成化風な淡い好尚のものを用い、それ以下のものは所謂回青の素晴らしいものを用いてゐるのを見るからである。回青は西亜細亜輸入のもので、宣徳呉須と殆ど変らぬものであつて、正徳時代雲南を通して支那に入り、非常に珍重されたものであつて、第一級の官窯染附には是が非でも用いらねばならない筈なのである。それを第一級の官窯に用いなかつたといふのは、その持するところの好尚に支配されたことを証明するものといえよう。それとも淡い好みの成化官窯染附は弘治染附の連続を意味し、華麗な回青を用いるものは回青が輸入されてからの正徳染附を証明するものか、私としては決定的なことはいえない。然し回青が輸入されてから遂に弘治風な第一級官窯のスタイルが消えらるると考えられない。矢張り好尚に支配されたと見るべきではなからうか。

今挙げた文の次に続く「官窯五彩深厚堆垛故に甚佳ならず。而して成窯五彩色浅淡を用ゆ。頗る画意有り。此の余が評確然と允たるに似たるや。」の文は極めて適切な言でもあつて、五彩創始時代の生々しい氣の利かぬ宣徳赤絵と比較して、洗練された豆彩風な成化赤絵は優雅瀟灑の極みでもあつて、赤絵として遙か芸術的なものであることは言うまでもない。事実成化赤絵以前にそれ以上のものもなくそれ以後にそれ以上のものはないのである。又こういう選生八踐の著者の意見が果して一般に通ずる妥当性を持つものかどうかを疑つて著者自ら読者に問うてゐるのも興味深い。

「文房肆攷」の成化窯の項に

「神宗尙食（大膳）には御前の成杯一雙、直、錢十萬、當時己に貴重此くの如し。」という文があるが、万曆時代成化の杯というものが如何に高価で尊重されたかが解るであらう。現在そういう貴重なものが残される筈もなく、皆後世に仿造されたもののみで、外国の有名な図録に挙げられるものも天啓の写し以上に出ない。

成化豆彩唐草文梅瓶（大明成化年製銘、高一尺一寸五分、径六寸三分）（口絵参照）

この瓶は小林古徑氏の藏されるもので、私が「支那明初陶磁図鑑」の構想を練つてゐる時に藤山順吉氏が関西から持つて来られ、私は大体成化に間違いないものと鑑し、その写真を見せて説明しようとした時には某氏の藏となり、写真を撮ることも出来ない儘に、「支那明初陶磁図鑑」序説第二頁に

「著者は此図鑑を編するに当り、これ等の三つの官窯系赤絵の外に成化銘の豆彩（五彩の淡い瀟灑なもの）の花瓶の真物と思われぬものを見る事が出来たのであるが、これは康熙写しでも、雍正写しでもなく、成化写しの何物でもないと思われぬのであるけれども、今日日本にこれを徴するに足るの成化彩豆の真物と思われぬもの決定的なものが存せざる限り、これを成化の豆彩と断ずることを躊躇した。その成化銘の赤絵は桃の花の唐草文で典雅優麗の極致を示すものといへば、豆彩風な淡い緑と呉須とを以つて葉を書き分け、真紅の色を以つて花を着色するものであつた。ボデーは麒麟波濤文壺（「支那明初陶磁図鑑」所載）と全く趣を同じくし、明初も成化頃のものに見るボデーの約束を示し、成化間違いなきことを証するものであつた。ボデーは余りに上質の精作である為、中継ぎの処は目立たぬが、よくさわつて見ると中継ぎのものたることを感ずることの出来るものであつた。」と記した（以下次号）

世界の屋根、前人未踏の靈峰ヒマラヤ征服に對する世界人の欲求には洵に熾烈なものがある。既に近代科学の粹をつくしてこの踏破征服を志してからでも幾十の歳月が費され何れも失敗の歴史と多大の犠牲を残している。昨年の三組も遂に徒手消然として下山した今年は今日迄のニュースのみにも世界のベテランが五組も計画され、早きは既に山麓に到達しているらしい。この中にわが日本の一組も交つてゐることは新生日本の誇りであり喜ぶべきであると共にその成功を祈つてやまない

『仁清記年銘物』への一追求 保田憲司

それ程の世界的バリエウはないかも知れぬが、わが陶界に於ける殊に色繪美陶の最高峰とも云われ「仁清」の活歴史が未だに判然としないことは私共斯の道に携へ者として痛根にたえないところである。私も仁清と取組んで十幾星霜を経て未だ自身を以て報告する資料を掴み得ないことは汗顔にたえない。しかしヒマラヤ登頂もあと一步のところ迄進んでいるらしい。年々歳々たゆまざる科学の新研究と抛擲せざる熱情がそこまで到らしめてゐるのである。わが仁清研究も不断の努力とうまざる熱意と愛情により一日も早くその神秘の扉を開きたいものである。

私はさきに「仁清名款考」(陶磁協会編集、やまの第二号仁清号)を発表しておいたが、その後の三

究でも名款に關する限りあの方程式の圏外へはみ出す程の新資料は現われぬ、殆んど總てその範圍で分類整理出来るようである。

それで其後は「仁清作品」の「記年、記贈併銘物」を追求してゐるのであるが、コレが仲々の難物で年号あれば行年なく、行年あれば記年なしでそう思う様には出現してくれないのである。既発表文献上の初代仁清初出は隔冥記の慶安二年八月廿四日らしく、最終年文獻は半泥子氏説によれば元禄十二年卯八月十三日(乾山自筆陶工必要)らしく考えられてゐる。問題の「仁和寺御記」は慶安以前及元祿以後は焼失又は滅失して仁清に關する限り既発表以外の新資料は出現しそらにもない。而して現存御記での初出は慶安三年十月十九日ではあるがこの時も行年は示されていないからこの意味では何の用もなさない。

發掘破片の「明歴二年」も、藤田家旧蔵の水指「明歴三年卯月日」も同様である。私の發表した「寛文四年辰十二月吉日」の色繪神酒徳利一雙も仁清及妻の彫銘ある点では珍資料ではあつたが年齢の点からは同じく用をなさぬ、又「寛文四年甲辰」記入の茶入も実見したが同断である。大阪一流の老商賣から「明歴元年八十六才」記入の茶入のあることも知らされてゐるが既に数年以上も過つてゐるが未だ私の実見実測に提供してくれないから資料として記録出来ぬ。半泥子氏は夢に托して「天和元年八十歳」作品があるらしく書いてゐるが実物は示されないし夢想録であるから問題となり得ない。しかし大体この正保五年戊子三月二十五日(改元

陶磁語彙 (二)

日本陶磁協会編

あげそこ(峯げ底) 桶底の様に底が入り込んであるもの。

あとだ(阿古陀) 阿古陀は南瓜の古名で、交趾香合、茶入、水指等に阿古陀形のものがある。因みに瓜形のもが宋窯の定窯、汝窯、影青等にあるのは周知の如くで、瓜の意匠はこの時代に好まれたとみえて、文様にも多く見受け、また宋画にも瓜を描いたものが出てくる。

あさがおなり(朝顔形) 茶碗の形の一つで、朝顔の花形に端反りになつたもの。

あつしゆはい(圧手盃) 端反りの盃で、手にした時に盃の上部が手を圧するのでこの名がある。

あとえ(後絵) 後繪付の略で、本来は本窯で焼いたものに更に錦窯で繪付したもの即ち上繪付を指すが、今日普通には焼成當時に上繪付したものでなく古陶磁に後世になつて値を高くなるために新たに繪付を加えたものをいう。例えば天啓染付の余白に赤繪を施して値が高くなる類である。また金襴十向附にも素地は古いが繪付は後世のものがある。李朝白磁に後繪付して古九谷に化けたものもある。

あみがさ(編笠) 茶碗で窯の中で自然に歪んで編笠状になつたもの。後世わざと編笠状にしたものもあるが、こんなのは論外である。

あみのて(網の手) 古染付や古赤繪によくある網文様のもの。伊万里でも眞似てゐる。

あんか(暗花) 細い線彫り文様。

慶安)の宗和茶会記以後、慶安、承応、明歴を経て寛文又は延宝年間位の(森田久右衛門日記)約三十年間位は、仁清の最活躍期らしく、今後何かと新資料の出るマキポイント即ち赤線区域と見て大過あるまいと私は信じてゐる。

昨年は大阪のある夏祭釜に招待されて行つたところ、その老亭主は私を別室へ呼んで「いよゝゝあれが出まつせ」と小声で耳に入れてくれた。私は胸ふくる、想いでその主人からの通信を待た。約束の日私は定刻早目に再びその家の客となつた。

小箱を包んでいる古代更紗の包をほとくのものもどかしく私は包を開いた。桐の古箱の中から小さな仕覆入りの小壺が出た、それは所謂「振り出し」である。あの茶籠に仕込ん金平糖容れである。

高さ一寸五分五厘、口巾外側八分五厘、高台徑一寸五厘、小壺形で肩部に笹耳が左右に形よくひねり



振出し小印
高 一寸五分五厘
口巾 外 八分五厘
中 廣 一寸九分八分五厘
高台 一寸〇分五厘
耳上り 四分五厘
天正二年—承応元年七十九才

仁清作耳付振出し御室瀬戸釉ウス青白なだけあり



貫入が現われている。土は御室土に少々の信樂を打つてゐるらしい純白のサラ／＼土。
心ある人ならばもうこれで仁清眞品と解していられるであろう。私も未だ手に取らぬうちに「是は頂ける！」と直信したものであるが更にお約束通りソロリと裏返して見ると、一瞬私の目はその底裏に咬いつけられて暫くは他家の座敷であることも、主人も息子さんも番頭さんのいることさえ忘れはてしまつた程であつた。そこには実に鮮明に
『承応。七十九才造。蘭印仁清』のヘラ書と押印銘があつた。右糸切は細くこまかく実に鮮かで、本式の折本諸道具は持たなかつたが鐘墨一個で充分によい拓本が採れたのである。

私は厚く謝意を表して一直線に家に歸り直ちに文獻資料と対比較討をした。茲に率直にその日の記録を轉写してみよう。

一、ロクロ及成形技術は初代仁清作と確認する。
二、瀬戸金氣釉は純粋瀬戸風に非ず、即ち田舎つばくなく更に洗練され精撰されている。
即ち京風化された所謂仁清瀬戸金氣釉で獨特の

付けられている。その肩部から口縁までが四分五厘胴巾の廣さ一寸九分弱。大休瀬戸金氣釉がかゝり、二重釉として白崩れがかけられ、それがある部分變して海水色となり、そこに例の卯之斑が出、運鏡

あめちまき(餡糰) 南蛮掛花入の一種で、紡錘状に胴が丸く膨れ、口と底は細く締つて、全体にロクロ目が立つてゐる。

いしはせ(石はせ) 素地の中の砂や小石が焼けはせて表面に現われて一種の景色となつたもの。唐津茶碗などによく見る。これも後世にわざと石を素地に嵌めこんで焼いたものがある。

いしやき(石焼) 土物乃至土燒に對する語で、磁器質のものをいう。

いたおこし(板起し) 大名物の唐物茶入等によくみる手法で、底面に特色がある。ロクロの台土に灰を敷いてその上に陶土を置き成形するが、台から起す時篋で底縁を撫でて余り土を切り離すので(余り土の一部は下方にはみ出して挙げ底風になりこれを俗に大名物底ともいう)一に篋起しとも云い、底面はザラザラしている。壺の類にもこの手法のものを見受け、仁清の茶壺にも板起し底のものがある。

いつかんじん(一閑人) 蓋置の一種。

井戸形の一辺に人形が一つ付いたもので、その状が恰かも閑人が井戸を覗いているのに似るのでこの名がある。両辺に人形のいるのを二閑人と云い、人形無いのを無閑人という。また祥瑞鉢の縁に人強の付いた一閑人鉢がある。

いとぎり(糸切り) 器をロクロから離す時に糸を使つて切り離すと、器底にその痕が渦状に残るが、これを糸切りという。糸底の語もこれから出たもので、後には糸切がなくても一般に高台を指す様になつた。因みに高台を意味してまた糸敷の語もあり、宗湛日記にも「シギ」の語が見えてゐる(つゞく)

華麗さと渋さをもっている。この言葉は矛盾ではない、謂う所の「姫さび」とはこのことなのである。

三、白崩れ釉は瀬戸美濃系の長石ものではない。御室白である。ウス青窯変は仁清作品の殆んどにつきまとうもので、この中に白が出、白の中にコレが出る。必ず必要条件の項目目卯之班即ち兎毫窯変となる。そして白の中には不思議に多葉性貫入が現われる。之を俗称逆鏡貫入という。小なりと雖も本格仁清茶入と同手法也。

四、土も問題なし。御室と信樂の混用にして純白手なり。サラ／＼とする方。鼠色でネバッコイ土でない方。柔か手でコッ／＼と音する方である。六、蘭印は私の方程式の「第四項、輪廓付」に属し殆んど正三分印である。

七、「承応」と「七十九才造」の影字は「第五項、影銘」に属し、書風書体は山口コレクションの「三景富士山香炉」の影名と同風である。筆勢は走っていないがドツシリとおちついている。上手でないが気品がある。僅か一寸余の高合内へ七字の本字と二字印を押すのである。走つては危ない。

扱、承應年号は後光明帝時代で家綱四代將軍襲頭初の年号で僅々三年にして明歴と改元されている。故にこの「振り出し」作陶時代を一応正直に(承応)と認めて元年と見ても三年と見ても僅かの差異だからその最終年の三年と仮定して遡算してみると天正四年が仁清の出生年に当るわけである。すると現存記年銘物の確実なものは明歴二年同三年及び寛文四

年ものであるからこれらは八十一才、八十二才、八十九才時の作品ということになる。

即ちこの年代時の作品は他例より見てかなり稀有のことであるが不可能とはいえないもので、まだ合理的に失われていない。又古文獻初出の慶安二年は七十四才時であり、宗和茶会記の正保五年は七十三才時で非常に確実味を帯びてくる。即ち古御室焼説に対し仁清作品と看なしてもよいことになる。しかるに一方に大乾山の人格を信ずるの余り、彼の自筆秘傳書「陶工必要」に記載の全文を信奉する人々があつて、それによると元祿十二年卯八月十三日迄は初代仁清生存説をとり、何等の疑義をほささないものである。

そこで今日迄現れた「仁清死後年説」を見ると重なるものに「寛文六年説」「延宝六年及八年説」等がある。もとよりこれらは確証はされていないが、一応これらを「振り出し」より通算してみると、寛文六年は九十一才、延宝六年は百〇三才、八年は百〇五才となる。九十一才位迄はまだ氣易く認められるが、百才を越すと不可能とは云えぬが少々肩つばものらしくなり、元祿十二年尙未だ存生なりとせば、正に百二十四歳となり、俄然事は神祕の世界へ飛躍する。しかし縮方乾山深省の筆跡は多くの他例があつて今や公認された形となつてゐる。又彼の人格も高雅にして温清、初めは富豪の三男坊であつて相慮の資産土地等の分母も受けたが藝術三昧、作家生活に入つてからは、淡としてよく清貧に甘んじてゐるからその誠実な人柄を高く評價されて彼がインテキ傳書など書き残すものではないと全幅的な信頼を受けて

いる。即ちこの書の中の仁清項目も全部眞なりという譯である。とすれば仁清譲渡の秘傳書の記年が元祿十二年だから初代仁清が正に生きてゐるといふのである。

とすれば私の茲に記録した「承応、七十九才造」の「振り出し」は偽物仿作なのであろうか?…振り出しの作柄は先述した。私は今も尙眞物なりと信じてゐる。若しコレが偽物ならとせば私は私の鑑眼を失ふこととなり、仁清に対する自信がなくなる。それと共に今日迄三十年間鑑て来た仁清作品の九十九パーセントは偽物なり!と絶叫せざるを得ないこととなる。大変なことである。

しかし、しかしである。私は最初からこの一例、この孤証を以て厚かましくも全般を律しようとしたのではない。実をいうと「仁清記年銘物」への追求が如何に至難にして労苦多きものかを知つてもらいたかつたのである。と共に茲に一投石を行い、次の足場固めの一ポイントとしての中間報告を行いたかつたのである。

大仁清と取組んで十年や十五年でその成果を挙げようなどとは厚顔無知と云われても仕方あるまい。私もそこまで自らを失つてはいない。今後何年か十何年か何十年かは知らぬが、結論を急がず、しかし休まず悠々と研究を継続するつもりである。若し記年銘物が現われたときはどしどし御発表願ひたいものである。

この一小振り出しもある趣味人の厚意によるものであるが、大体、偽物、倣作というものは原則としてなるべく「余計なこと」をしないものである。

寫眞小解 (1)

表紙 志野香合 銘手車

しやれた志野香合で、手車と云う銘がついて居る。蓋と共に実の方もなかく、圓案で、三百六十年昔の出来と思えない新しさがあつた。

口絵第一頁上段 鼠志野檜垣茶碗
(口徑四寸二分高二寸六分一分九分)

下段 志野檜垣茶碗
(口徑四寸五分高三寸)

昨年の秋季大会、志野、織部、黄瀬戸展に出品されたもので、二種の檜垣模様を比較的に出して見た。鼠志野檜垣は圓案化されたもので、発色理想的で、実に見事な出来のものである。土やはらかで、見込深い。鼠志野檜垣茶碗と云うものは少ないものであるが、大会には三碗も出て驚いたことであるが、この茶碗を見ると高麗の檜垣茶碗を思い出す。これは志野特有の姿をして居るが、高麗のそれは顔形である。朝鮮李朝期には、この圓案をよく見かけるのであつて、結局志野へ影響したものであると思ふが、高麗檜垣茶碗が朝鮮後以後の日本の注々出来るとよほど日本人には好まれた圓案であつた様である。下段の絵志野茶碗の模様は、一面には太い一線が引かれていて片面は寫眞の通り、鼠志野と異つた檜垣線である。面白い対象をなしている。白の上釉がとくに美しい。対象的に腰の赤味がその為め一層映えてゐる。



紅梅雅会の記

岡本孝平翁
— お濃茶の点て出し

紅梅満開の北鎌倉の丘上に風流三味の大旦那岡本一久翁の営みがある。二月八日正午、北倉會當番茶會に集うは、鈴木新吉、齊藤利助、瀬津伊之助の諸家、細野申三翁は都合悪く珍しくも欠席、御相伴に同村の服部梅葉、田山方南の両居士、円覺建長に連る山に対して、一座六客が揃ふ。お詰めを承つて寄付の白湯を汲む。お床に隣組の青柳画伯近作紅梅を描きたる小品ながらも念作が掛り、脇に宋白磁碗なりの鉢に万年青の緑葉紅葉鮮麗なり、主人はこの道に深き含蓄ある方能雅人。

迎えつけあつてお懐石の席へ籠り通る、お掛軸は旧交厚き古徑画伯より御年玉という紅梅の横幀、鶴心堂の表具昨日出来のホヤ／＼、風呂先屏風を置き、水器の位置に佐藤清藏翁の刀跡さゆる眞龍鶴の香盆を莊る、この庵王獨創の舞台装束である。

持ち出されたるは東大寺盆を折敷に方曆柴付の向付、兩碗は喜三郎の作らしく漆黒、酒次ぎに朝鮮唐津と火色明るき古備前、俱に雅陶堂經由のものらしく名器と拜見、同席の瀬津兄は微かに笑み給う。焼物をすめらる、高台梅花文様の鉢は古九谷の雄品、盛らる、儼の店場は一段と美味、主人の得意や察するに余りあるもの、酒盃は六客六様のとり交ぜ、著



「志野・織部・黄瀬戸展」を顧りみて

小 森 松 庵

昨年十一月の日本陶磁協会の大会の展覧は今迄一度も企画されなかつた位名品優品が集められた、立派な展覧であつた。志野を愛する方、黄瀬戸を喜ぶ方、織部を愛する方、皆各々が其の好む処に随つて楽しんで来たことであらう。

然し、所謂一般公開の展覧の欠点、例えば千変万化の織部文様、型等を、向附を百個近く並べて研究するとか、又は雑器(例えば燈道具の種類)の面白さの観賞等が欠けていた。

又一般の方々の「到底買得ない様な名品優品で淋しくなつた」等の声も聞いた。次に列品カードに窯別を(はつきり解るものだけでも)入れて置くべきだとの注文。是れは確かに申すに及ばない次第で、実は列品解説の時詳細を申上げる事にし又御質問に答える予定であつたのです。又別室の破片を見ずに帰られた方もあつた様ですが研究される方は是非手に取り土、釉、作行、文様、その線等をよくよく観察されるべきで名品優品より、より以上の注意が大事だと思ひます。

志野織部黄瀬戸所謂美濃古窯の良さ！ 到底唐津や備前等々に見られぬ美！ 中には自分は唐津の方が好きだと云われる方でも織部志野黄瀬戸の美はどうしても無視し得ぬ！

美濃窯の前身たる古瀬戸！ 弘仁時代に遡る日本最古の陶業地！ 印花の、又柳文様の瓶子、次に足利期の無数の茶入並に天目茶碗等々が頭に浮ぶ。傳統を持つ陶業地！ 陶工の血統！ 陶工の魂！ 唐津備前等が茶陶として生まれる前は何処迄も所謂民窯であり雑器の窯であつた。備前や信樂や常滑等の素朴な愛すべき「うづくまる」と古瀬戸の「うづくまる」風の壺とを比較する時、素朴な内にもはつきりと工人の魂を、工人の風格を感じ得るのだ。土くさき素朴さは古瀬戸には無いのがその本来なのである。志野織部黄瀬戸は長い古瀬戸の傳統の上に咲いた花なのである。

青磁展や染付赤繪展の時は熱心に研究される方でも二時間、三時間、列品解説の後も一通り見ると帰られた。今度の展覧では短時間の方でも二・三時間大抵は半日以上、中には二日も続けて来られた方々もある。而もその態度はあれを視是れを視ブラ〜ブラ〜、入場者数は前回と変わらないのに会場は何時人も人でいっぱいだった。

日本陶器の「温かさ」「親しさ」それは心の故郷を感じせしめる何者かを！ 血のつながりを感じせしめる何者かを！

に親たか、

中国美術専門のY商店のM君が

『日本の物は良く解りませんがこの展覧の中で一番良いのはどれですか？』

『小部屋の間、鳳志野とそれから……』

『そうですね、貴君の云われる通り最高の名品でしょう。此の展覧で特に評判の良いものです。然し、この云うものには各人の好みが多分に出て来るから、どれが一番だとはなかく云えませんが今貴君の云われた物が美しさがはつきり出ていることは一番です』。

又ある方々から志野の茶碗ではどれが一番なのか織部茶碗はどれが一番良いのか、志野水指ではどれが……黄瀬戸はどれが……等々の質問を受けた。私は結局あなたが一番好きなのが一番良いものなのでしょうと云う意味の答をした。

扱て私にはどれが一番良いと云えるか……私が所謂鑑賞陶器から何時か離れた原因の一つは此の『比較の世界』なのだ。

鑑賞陶器の場合同種同質の物の場合比較対照で少しすぐれた感覚の所有者なら一番二番三番と割にはつきり位付が出来るのだ。そして一番がやつぱり形もあがりも良くそして一番値も高いのだ。近代感覚から云つたら強い明るい光線の下ではつきり比較し得る良さを持った所謂鑑賞陶器の尊重は当然であると同時に傳來箱書付等々を一應捨て去り物それ自身身の美しさを鑑賞して行くのが本道の道だと云えるのだ、事実本当に良い物と並べて見くらべるのが一

番手取早い勉強だと云われる所以なのだ。

それでは再び私にはどれが一番……私はY商店のM君の並べた数点を一番良い物だと云うより無い。但し、私の此の言葉には大きな但書がつくのだ。『此の展覧場で』『現在並んでいる展覧品のうちで』『一番美しさがはつきりしている点で』『此の光線の下で』……結局私の挙げる数点はM君と同じではないか。鑑賞陶器の見方からみれば同様の結論が出るものだ。然し志野織部黄瀬戸を茶陶として見る時は今の結論は決して正しい結論ではないのだ。

では茶陶から見た時はどれが一番……此の間に對して私は志野の場合でも織部の場合でも茶碗に例をとれば『貴君ほどの茶碗が一番好きなのか？』と云うより無い。そして私にそれを決定しろと云うのなら其の人がお茶室を持ち、お茶をやっている人なら先づその茶室をみせてもらおう。二疊か三疊か四疊半か六疊か、唯好みの席か、南向か東か北向か……戸障子窓の採光がどうか、茶室は今作つたばかりの新しいのか古いのを移したのか。水指は備前唐津仁清等々どんな形景色の持っているか、裏茶入茶杓も同様皆みせてもらった上なら、此の志野茶碗が或は織部茶碗が一番良いと云いきる事が出来るのだ。

私は志野茶碗の一群の内に広澤の茶碗を見た時前から有名なあの茶碗がそれ程美しく好ましく見えないのだ。そして反つてまわりにある強い線で書いた鉄も赫々と濃く出た画志野の方が刺戟を与えている。然し静かに見つめれば繪も赤みも実に落着いたその

洗用の繪唐津筒は発色よく好ましく雅品である。

水屋調理方は円覚傳堂の大龍君が出張、口福を満して結構。中立ちが寄付の階上にて、これは又莊り付け一新、雄獅四辺を拂う白梅を描くは法橋宗達の落筆あるこの家の至宝、古徑先生は若書ならむとの仰せなれど、この道の大家瀬津大兄は然らずと自信の一言、一座敷嘆息を呑む。床脇の置物は漢銅の『豆』、古色言いがたく二千年の星月を地下に健在して、大陸文化の歴史をといむ、故大塚稔氏の愛品なりしとか。

再び茶席に至り喫茶の事始る。中釘は荒川豊藏氏の新機風志野旅枕に白き椿を無雑作に挿さる。官休庵宗匠は蘆澤と銘、霞に宝珠文の古芦屋釜は時代古く、眞塗手桶の前に桐木地臺、紅梅を描くは古徑先生。点出しのお濃茶は新趣向にて一座の面々、岡本式新趣向を巡喫し一言ありたき処ならむも、遠州御藏帖登載の五器茶碗に負けて沈黙。お薄は自作白画の紅梅茶碗を始め、土牛画伯染筆の二碗その他を用いて一と先づお開き。

窓前の紅梅に春の淡雪繪よりも美しく、斯くして樂しき如月の北倉会も四時すぎ散会とは相成りける。(陶々庵生)

秋風吹雪を添へて

春屋圓鑑の墨蹟

澤庵江月清嚴の頃は天下泰々の御代、一期前の古溪宗陳、春屋圓鑑は戰亂乱世、私は墨蹟を通じて織

豊時代の後者を一倍愛好するものです。春屋は江戸期の茶人間にファン抄く特に宗和侯は仁清と親しき反面、春屋を嫌つたと言ふのです。天衣無縫の筆意は春屋の高格を偲ぶに足るもので、隨喜して所蔵する私ですが仁清、宗和も好ましく賞玩して居ります。

家藏 秋風吹雪 落葉滿長安 一行は宗偏門の高足深澤隱松の所持せるを、加州藤葉御用龜田是庵に移り、更に茶友間野宗匠を経て、金澤の料亭山の尾主人の愛玩に歸し、東京星ヶ岡茶寮にて鈍翁を招き一亭一客の茶事に用いたとの事です。松永耳庵は山の尾立立会にてこれを落札、魯山人に乞はれて割愛せるを、昭和廿二年秋私の所有となりました。仍てこの先、如何なる流轉あるやこの一軸……

鎌倉通見

□菊山当年男氏 芭蕉翁研究旁々、作陶に親しみ居らる、氏は、陽春四月陶藝個展開催を同郷田山方南氏の紹介にて黒田陶苑美術部にて。

□高橋、瀬津両家のおめでた 東京美術俱樂部重役高橋清作氏次男の君と瀬津伊之助協理事次女満里子嬢との婚約相整いたる由御同慶に堪えず

□東京陶磁器協同組合は東京都、通産省と共催し上野公園旧美術協会に於て日本陶磁器の生産状態及び製作工程実演、製品展覧など可成大規模なる展示会を催す。

四月一日から十五日まで、無料公開

佗びた姿の良さ、私は良家の生娘が藝者と並んで裸にされている様な淋しさを感じた。品物が可哀そうに見えた。こういう感じは展覧場に幾つとなくあった。私はこれ等の器物を自分の茶室でじつくり一服しながら眺めたかった。七つも志野の水指が並んだ事は始めての事だろうが、それではどれが一番良いのかと問われたら、鑑賞陶器として水指一個を眺めるのならこれが良いと答えられるが自分がお茶に使う為選んでくれと云われたら私は前の答を述べ茶室道具総てを眺めた上、或は『貴君には志野の水指は必要ないでしょう』と答えるかも知れない。鉢にでも同付にでも同じ事が云えるのだ。お茶は何処までも総合的調和的なものだ。陶器のみでなく漆器・木工品・金工品・織維品等々の取合せに由る美、而も茶庭茶室の構造採光に支配されるのだ。レモンとつまらぬ水次で、壺と花とテーブルでブラックは美しい画面を作り出しているのではないか。

私は茶陶を以て第一とするのではない。名器は名器で良いのだが、名器即名茶陶ではないのだ、鑑賞陶器に於ては、又展覧場に於いては、画も形も力強いもの、方が見ばえがする。美しさが強くはつきりとして見えている方が美しく見える。ところが三疊や四疊半の茶室ではそれが反つて『どぎつい』刺戟を与え目をむいて見ると見えない全体を雰囲気を感じ、又は名品誇示の亭主の心のアサマシサを感じせしめる場合が応々あるのだ。この点お茶と名品と両立せぬ名品が澤山あるので茶陶を買ったものは此の紙一重の違いを心せねばならぬ。又茶道具屋さんも知つていてか知らずにか鑑賞陶器と茶陶をゴッチャにする傾向がある様だ。

然し私は茶人的感覚を最高と云うのでも無い。『一個』の陶器(陶器に限らず他の美術品に対しても)の鑑賞に於ては、純粹鑑賞家の方が、より高い趣味を、より正確な意識を、より鋭い感覚を持つているものを生活の中に、己れの人生の教養の資として生かしている人々を知っている。そう云う人々を私は心から畏敬し、又時には驚く事さえある。然し、私は悲しい哉お茶に入つて仕舞い、『調和の美』『佗の世界』を把握し、今では其処に安住の地を見出している。物一個の高さを感じ知りつゝ、己れの肉たり得ぬ己れの実存たり得ぬ物への無関心さ、厳密に云う時茶陶はそれ『一個』のみの存在はあり得ないと云い得るのだ。

陶説に就て

尾崎洵盛

一 緒 言

日本陶磁協会に於て今回陶説と云う機関雑誌を發行することとなり、拙稿陶説注解を之に連載することとなつたのは何かの因縁であらう。小生の注解する陶説は清代朱琰の著であつて苟くも焼物に關心を有する者は其名を知らない者はあるまい。然し之を通読して全く疑問なしに理解し得る者は恐らく一人もあるまい。

願れば予が初めて此書を見たのは四十五年前明治四十一年の春であつた。當時已に本邦に於ては葛西因是の翻刻本及び之を仮名交り文に訳した竹泉の和訳本が出版せられあり、又ブツシエル氏の大著『東洋の窯芸 Oriental Ceramic Art』出版せられあつたが故に、此等の書を参考としたらんには陶説の原書がある程度読解することを得たであらうが、当時予は未だかかる参考書あることを知らず、直ちに陶説の原書を見たのであるから、殆ど一行も満足に読解すること能はず、徒らに望洋の嘆を發して之を抛擲するに過ぎなかつた。

其後前記の諸書及び其他にも種々の参考書あることが追々判つてきたから、此等の書を探し求め又は借覽して得るところ少からず、大正十二年関東大震災の前後から陶説の解説書を書いてみようといふ念發起するに至つた。蓋し従來の訳解書は何れも一長一短ありて完全なものはないからである。然し愈筆を執つてみると此仕事は一見容易の様に見えるが極めて困難であることが分つたのである。其困難なる原因を挙げると、1 陶説原刊書及内外の翻刻、反訳及び注解等の諸書を悉く通覽することが困難であること。

2 陶説に引用せる二百種に及ぶ原典を通覽することが困難であること。及び 3 術語、方言等の如き容易に解釈を求め難きこと等である。今少しく此等の事情につき述べておく。

1 陶説原刊書、薛序本等は何れも稀覯に属する。本邦に於ける翻刻書木米版、葛西版等も亦珍本である。ブツシエル氏の大著『東洋の窯芸』及びその底本と為つた道光版浮梁県志、及び更に其の底本となつた明版江西大志は何れも稀覯書である。而かも此等の書を見なければ陶説の注解は殆ど不可能に近い。

2 陶説に引用せる二百種に及ぶ原典の大部分は珍らしい書ではないから此をみることは左まで困難にあらず、然し其のうち若干は著者の名を挙げて無いものがあり、又著者の名を挙げて書名を示さないものがある。此等の内には容易に其原典につきて引用文を確め得ないものがあることは後述する如くである。案ずるに陶説の撰述に當りて著者朱琰は恐らく一々原典を調べて此等の引用文を挙示したのではあるまい。朱琰が此の書を書いた頃には欽定圖書集成、格知鏡原等便利な百科辞典が已に刊行せられていたから、朱琰は此等の書から極めて容易に糊と鉄とを以て此等の引用文を引抜き得たのであらう。事実此等の書を対比すると彼が原典を調べなかつた証據が到る処に散在しているのである。従つて吾人は陶説を見て朱琰の博學に驚くことを止めなければならぬ。又此等の引用文の意義を彼が悉く正解していたとは無論考えられない。何となれば此等二三種の百科辞典的書物の引用文の誤記は其ま陶説にも現われているからである。然し陶説の注解を書くには如何にしても一応此等二三種の原典を抄録する必要がある。之は引用文の意義を正解するにも又其誤を正すにも省略し難き仕事である。

3 術語、方言等は後述の如く如何とも為し難きものである。さて愈筆を執つて陶説の注解を書くとなると右に述べた様な困難

があつて容易に之を突破すること能はざることが分つた。そこで百方苦心して此等の困難を突破することに努め昭和五年春頃兎に一角一志粗略ながら陶説全篇の通解を了つた。然し此稿本は何分未解決の問題が余りに多く、只自分の参考に資するのみで、之を公表するまでには至らなかつた。其の後十年を経て、其間更に苦勞の甲斐ありて前記稀觀の諸書中漸次一見の機会に恵まれたものもあつて、多年の疑問の氷解せるものも少からず、昭和十五年頃前の稿本に筆を加えて世に問う機運が漸く熟し來つたかに思われたから、其準備に着手していたら、突然塩田力藏翁から來書あり、陶説は自分が注解して出版するから拙稿は待つてくれとのことであつた。其時つらつら考ふるに何も待たねばならぬ義理は少しもないが、然し強て其頼みを排除して拙稿を刊行する必要はない。若し塩田氏の書にして完備せる良書であれば拙稿を出す必要はない。又良書でなくとも少しも参考になることがあれば他に拙稿を成就する上に裨益するところもあるであろう。諺に三人寄れば文珠の知慧と云うことがある。後に書いた本が先出の本よりも一層完備すべきは当然であるから、これは一つ塩田氏の書の出るのを待つて其の悪いところは排除し、其の良いところは之を参考とするに如くはないと考へ拙稿は出すのを見合せたのである。

塩田氏の書は昭和十九年の春に「対譯新註支那陶説」と題してアルス社から刊行されました。此書を見ると勿論完備せる書とは称し難い。少しは参考と為ることは無いではないが、其の最も力を費せるは主として年表索引の類であつて肝要の陶説原文の解説注釈に至りては杜撰、粗漏の個所が到る処に散在し、甚しきに至りては誤訳誤解も少くない。塩田氏は文章の解説の如きは自分の任にあらず、自分は専ら力を技術的方面に致すと自負しているが、已に對訳新註と題している以上文章の解説に杜撰粗漏誤訳誤解のあることを自

分の任にあらずなどと逃げ口上を云うことは許されまい。加うるに技術的解釈を主とするは自負せるにしては其資料が余りに貧弱である。中国陶磁の技術的方面の研究につきては古くはエベルマン、プロニヤール、サルヴェター諸氏、廿世紀初頭にはヴォグト氏、其後サー、ハーバート、ジブクソン、コーリー教授、ドクトル、メロア等諸専門家の有益なる研究が存在するにも拘わらず、塩田氏は一言も之に触れていないのである。此の如くにして尙ほ且つ技術的解釈を主とすと放言する如きは全く呆果てざるを得ない。

小生は技術家にあらず。従つて陶説の注解を試むるのも技術的方面を主とする者ではない。其の目的とするところは陶説原文の解釈である。勿論時に技術的方面に言及することもあろうが、其詳細は技術的専門の学者の研究に譲らざるを得まい。又原文の解釈につきては先人の解釈を参考として之を批判し、其の採るべきものと排斥すべきものとを窮理弁明し尙自己の意見あらば之を採つて大方の批判を請ひたいと思う。若し夫れ如何にしても解釈し能はざる至難の問題に至りては之を一括後記して博雅の示教を待つこととする。

近頃某々二三子の如く読めない個所は飛ばしたり又はゴマカシ読みをしたりして、漢文はよみ易いなどと人を欺き自らを欺く如きことは為さざる積りである。

一 陶説の著者朱琰の事歴及び本書刊行の由來

陶説の著者朱琰は中國人名大辭典によると浙江省嘉興府海鹽の人で、字は桐川、笠亭と号し、乾隆の進士で阜平縣の知縣に任官した著書に陶説、及楓江、湖海樓諸集ありと記してある。又後述本書再版黃跋本の黃錫鑾の跋によると朱琰の著述は右の外尙ほ未刊書に説文録、異韻學、琴學、古文清英、唐百家詩選等があり、已刊書には金華詩録、明人詩鈔、唐詩律箋、詞林合璧、律賦夏課、學詩律速、笠

亭詩選等がある。又其書齋には樊桐山房、書画船、泊檣山房、友石居等があつたと云う。

朱琰はまた画に工みであつた。墨林今話に記してある左の一條は注意する人が少い様であるから訳出する。

朱笠亭山水に工みなり

海塩の朱笠亭、炎、又樊桐山人と号す。

乾隆丙戌(三十一年)の進士なり。直隸阜城縣に官す。未だ幾くならずして歸りて力を學問に肆まにして著述甚だ富あり。詩、古文に工みにして兼ねて山水を善くす。震沢の張(看雲)棟と交りて其用墨用筆の法を得たり。又秀水の張瓜田(浦山)と遊びて画旨を究め、復た宗派の正を識れり。武進の董東亭(潮)居を海塩に移し、尤も笠亭と莫逆と称せらる。(墨林今話、卷三、二葉裏)

張浦山は画徵録の撰者として有名であるが、其山水は乾濕互用、氣韻深厚、或は亦た澹色輕荷、尤も天趣を得たりと云はれ、其画品は王麓台に譲らずと評せられた。加ふるに白描人物、写意花卉、動物画に至るまで衆妙を兼ねた人であつた、又朱琰の私淑した張棟の画は多く見ることを得ないが、此人は博学、詩文に工みで尤も山水を善くし、其の宗南華先生(張鵬舉)の訣を得て、専ら乾筆を用ひて設色を喜ばなかつた。墨林今話には其画古松を評して枯毫焦墨、筆々蒼老、其画品を擬するに董香光(其昌)を法とするに似て而かも古健は余りありと云ふている。又朱琰と莫逆の親交ありし董東亭は乾隆癸未(二十八年)の進士で塩鹽に住んでゐたが、同郡知名の士と結社聯吟して嘉禾八子の目があつた。詞尤も綺麗紅豆歌を作るや、人争つて傳誦した。朱笠亭と最も善く、亦た山水に工みで、互に相傾倒した。不幸にして咯血の疾ありて三十六才で死んだ。此人の孫娘琬貞と以ふのは詩画に工みであつたが、後に湯雨生、貽汾に傳いだのだと云ふ。(右墨林今話卷三による)。

陶説の著者朱琰の事歴と其交友關係は右にて大凡判然したと思ふ。此書は卷首に裴日修の序があり、末尾に乾隆三十九年歲次甲午春仲、文藻及び乾隆甲午三月朔新安後學鮑廷博の跋がある。而して右鮑跋によると「海塩の朱笠亭先生は經世の才也。丁亥の歲、江西大中丞吳公の憲署に館す。因て悉く景德窯器の製法を得て陶説六卷を撰成す云々。先生需次に證に就き、博に鑿校を屬す。之を梓氏に付して既に竣る。因て教語を後に盡す」とあるから、此書は乾隆丁亥の歲(即ち三十二年)に著者朱琰が江西の大中丞吳公の役折に寄食せるとき、遠からざる景德鎮の窯業を研究せるに緣由し、鮑廷博が其依頼を受けて校讐等の任に當り、之を梓氏に付して出來たと云ふのである。而して其出來上つたのは鮑跋によりて乾隆甲午即ち三十九年(西紀一七七四)であることを知るのである。

因に朱琰の描いた画は小生の知る限りでは唯一の例が備前の大原氏の所藏にある。南画津梁と云ふ本に其の木版刷の縮図が載せてある。

三 陶説の内容

本書は六卷から成つてゐる。

卷一は説今と題して更に之を饒州の今窯及び陶冶図譜二十則の二に分ち、前者は清朝の初めから著者朱琰の生宋せる当時即ち乾隆の中半に至るまでの時代に於て景德鎮に於て磁器を燒造せる沿革及器物の主要を、又後者は同地に於ける磁器燒造の方法を敘述し、之に著者の考証を附記してゐる。

卷二は説古と題して、更に之を原始及古窯の二章に分ち、原始の章に於て周書、物原、紺珠、呂氏春秋、説文、古史考、春秋正義、考工記、韓非子、史記、禮記等の諸書に就きて太古神話時代から三代に至るまでに造られたといふ焼物の原始に関する文献を集めて之

の丸印のものがあつたが、郡山の茶人の話では、木津あたりの作のようにきいたが、これもはつきりしたことを知りたいものである。

伊藤家を辞してから阿須賀陶苑に岸園山氏を訪ね暫く話したが、やがて縁戚の美校山の影刻家片山義郎さんと諏訪驛で落ち合い、湯の山の寿亭を訪ねた。

これは片山さんが寿亭の新館増築に田中支配人から頼まれたシヤクナゲ意匠の床脇陶製透し彫りと欄間の出来栄を拜見のためで、作は削りの痕を生かして大まかで出色であつた。増築階下は望城亭と前から命名されている位に、湯の山温泉隨一の眺望で、兩側に延びて山裾の中央にはるか伊勢港を隔て、昔は名古屋城が見えた相で、思はず快哉を叫びたい程で、猛暑といえども冷風汗を知らない景観である。

寿亭の先代が仲々の数寄者だつたので、永年の間の書画類が部屋々々を飾っているが、湯の山の山岳院にあつた、桑名の画僧で復興土佐派の流れをくむ花の舎唯念の描いた板戸が注目された。土地柄綺羅の三幅対が拜見出来たのも嬉しかつた。池畔の三席に続いた、江月の心月輪三字額がかつた。寄付は古調愛すべきものがあつたが、先代が郷里名古屋の旧宅から移築したものだ相だが、専門家の話に室町の造りとの由であるが、いかにもと肯かれた。

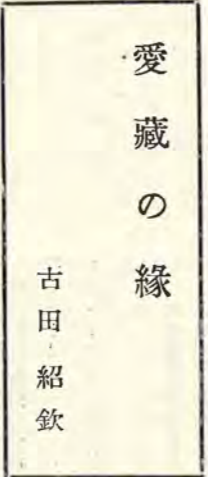
正月には始めて五條山の赤膚焼の窯元を訪ね、窯主の古瀬さんや楠瀬日年老にもお目に掛つたが、西の京から半里程の道すがらの眺めは仲々に風情で、春秋の窯元訪ねの散策にはさぞと思われたことである。室町頃、五條山一帯には奈良の諸社寺の土器屋があり、例えば「大乘院方土器屋」も「薬師寺八

幡宮之上山キツ在之」と記され、この辺はまた室町以来有名な奈良風炉の産地でもあつて、永樂初代宗印(永祿元年歿)も「春日土器作手」と記され、もとはこの辺に住んでいるらしい。そんな次第で五條山近傍は室町以来奈良附近製陶の中心であつた様で赤膚焼の源流も溯ればそこら辺りまでも迎れよう。

大和太納言秀長が郡山に入城したのは天正十三年だが、彼も仲々の数寄者で、宗湛なども招かれており、土風炉師と九郎を招いて、云々のことも全く荒唐無稽とも思われず、反つて大いにあり相なことと思われる。与九郎印の雲華など一概に深草とされてはいるが、今後再檢の要もあろう。それから小堀遠州の父新介正次も秀長に從いて同年郡山に移つて居り、その後遠州十六歳の時には父共々松屋の茶会にも招かれて居るので、この時代は遠州も未だ少年の頃としても、父正次も相当数寄者だし、五條山の因縁も絶無とはいわれず、殊に大阪の陣には遠州はまた后詰の兵站部の要務を帯びて暫く郡山に滞在して居て、その間五條山にも近いこと、赤膚と遠州との関係も今後大いに諸家の御研究に俟ちたいものである。一説に、五條山は風炉が特産で、遠州関係も主として此の窯では風炉が多かつたのではないかと云うがこれも面白い説である。



愛藏の一幅に以天宗清の自画山水図がある。この幅は全く予期せぬ縁で入手に及んだ。一昨々年、つまり昭和二十五年の秋と記憶するが、見知らぬ人の来訪を突然うけた。数幅の懸物を持参し、暇があつたら見て買いたいというのである。好きな道とて早速書齋に招き喜んで拜見した。この見知らぬ客人は誰から私のことを聴き、何かの底意があつて見せようとしたものらしい。客人はもとよりこの貧書生が品物を買う相手とは考えていない。まあ早い話が本物かう本物の意見さえわかればいいといつた様子である。やがて、次ぎ次に軸をひろげる段になり私の顔つきを見守つている。所が何本目かの一軸をひろげられて私はうなづいた。こいつは聊か味なものだとピンと来た。



りの以天宗清自画山水図である。丁度原稿料を貰い、女房子供の着物を買わんか、或は書物を買わんかの思案を經ること数日、この一幅が突如として眼前に顯れ、苦勞な思案は忽ち解消したわけである。災難は女房、子供にふりかゝるが、この軸のよさがわからぬ女房子供語るに足らずの目負心がウツボツと湧き、いささかの後悔もない。至極さりとした氣持である。金持ちは金があり、何んでもさつさと買うものらしいが、先づこんな氣持であらうか。儲て読者にはこの幅の自慢がわかりそうもないので一応の説明を加えねばならない。この幅の大きさはさからいうと縦横の寸法はまことに茶席の床にピッタリである。右よりの上部に「飛行小路是湘崖欲渡魚舟又隔家、楊柳枝從風去斷、雪山芳々樹梢斜」と以天の賛があり、宗清の朱印一つがある。画は一道人が杖杖を持つて巖頭に立ち、去り行く船を眺めている。巖頭の後部には遠く山嶽を望んで竹林が見え、村家が点在している。幾本かの楊柳も巖盤に生えている遠景をなす山嶽の嶺近くに判読のむつかしい墨印が一つある。これは古田備考に載つている印と同じで、以天の号である機雪とも讀むのかも知れない。

しばらくしてから恐る恐るこの軸の代価をきくとまあこれこれだとの返事がある。瞬間によし自分でも買える代物だと思つた。且つて一先輩が私に骨董を買うコツを傳授して曰くである。買いたい、欲しいと思つたらまづそつ気ない素振りをし、落ちついて、軽く値をきくことだねと。この秘傳は恐らく今では通用しそんでもないが突壁にこの秘傳のことを思い浮べた。いくらかあせる心を押えたものゝ然しそんな素振りはしようにも末経験の悲しさ、とても出来るものではない。知らぬうちにふところの手つき込み、財布を出してながしの代償を支拂つた。これが大いに愛蔵自慢あ

此山水図の見所は一道人のつく杖杖である。此一本の線が如何にも強い。この線は以天のような人物でなくては到底画けるものではなからう。以天は大

寫眞小解 (2)

口絵第二頁 三頁は久志氏の本文中に記され、口絵第四頁 上段 黄瀬戸蓋向付 下段 赤織部土瓶形水指

大会では、この黄瀬戸蓋物が五客をそつて出陳されて、好事家を大いに喜ばせたことだつた。外側には陰刻の模様なく、只蓋のつまみに菊花を浮彫にしてつけている。これは実にしやれた表現で、蓋をあけて見て蓋裏共々に、上手な線彫で模様を現しているところにこの器のよさがある。本来からいうと外に絵をつけた所だが、それをやらす、知つてか、知らずにか、内側につけられた銅軸のタンパンが外側にちみ出て、かすかに緑色が黄色の地色に美しく映えている。(徑五寸一四寸七分)

織部で最も美しいのは鳴海織部と呼ばれている手のものであるのに、在來茶人、商家では一段値を下げて考えている。おかしな現象である。然も鳴海で焼かれたものではなく同じく美濃窯、とくに元屋敷窯、太平窯にすぐれたものが出来ている。技巧がすぐれていることも確かで、図案、造形から云つても実にいいものである。半面亀甲文が大きく赤白二重にくまどられ、半面藤花らしいものが太い白線と交互をなしている。手及口、肩に緑の織部軸がとつぷり流されていて、腰の赤味のある軸とよく対象をなしている。本来の目的では水指ではなかつたらうが、現在水指として使用されている(高さ九寸三分口径六寸二分)

徳寺に住し、後柏原天皇、一説には後奈良天皇から正宗大陸禪師と特賜された程の人である。北條早雲が歸依し、遺言によつて氏綱が小田原に早雲寺を創め、この人を開山として迎えている。氏綱は以天が小田原に趣く時は自ら城門まで出迎えたというから又余程の尊崇をしたのである。先づ当代一流の禪僧であつたと云はねばならない。書風から見ると禪の道力が出来ていたばかりでなく、知性に富んだ学僧であつたように思われる。それに風雅の嗜みも決して浅くはなかつたであらう。この一幅から云つても全体の調子が何んとなく優雅でいて、然も洒脱した趣が心にくい程現れている。大休、以天の書画には随分いかかわしいものがあり、私のこれまでに見た箇中では、この愛藏の一幅に到底及ぶものはない。それに驚いたことには箱の字は白醉庵であり、軸の巻きどめには「山水之圖、早雲寺以天和尙自画賛白醉庵(花押)」とある。白醉庵芳村親阿は一代のめきとであり、蒐集家でもあつた。この庵主が屢々この幅を茶事に使つたのではなからうか。或は不昧公あたりが割愛を望んで、よだれをたらした代物かも知れない。

實際を云うと私はこの軸が白醉庵所持であつたことを知らずに買つたのである。買つた後でこれを知つてビックリしたのである。これは全く天からの授かりものである。とは云え私としては囊中をさらけ出し、奮発して買つたのであり決して掘り出しの類ではない。

* 以天宗清は天文三年(一説に同廿三年)正月九日寂、芳村親阿は嘉永元年六月十九日寂、年八十。



茶の湯好日会 かけある記

黒田陶々庵

柴庵の田山方南氏
雪村友梅の墨蹟光る

雪隠清寒未だ知らず、暗香時に迷ひ好風吹く、野橋春光を漏泄する処、政に一兩の枝に在り。墨蹟研究家田山信郎氏の出處である。今更に賞めそやすのも月並、この人この日の幅、暗香ならぬ清光を放つ。聴けば伊藤文吉氏の北方文化博物館所蔵にして、重美、友梅の墨蹟として現存唯一のもの、由にて友梅の郷國越後に保存さるゝも縁と云うべきである。料紙は梅花図の蠟紙紙を用う、加藤厚水博士旧蔵と云。

釜は古芦屋眞形、信長公が松永彈正に贈りしといふ傳世もさりながら古色愛すべき佳品、水器は砂張に学ぶことが余りにも多いのである。私は身近かに瀬津さんを得、自らの師範と決めている一人である。二月の好日会は会の代表とも申すべき方南、瀬津兩大関の懸釜と、梅日和の好天に耳庵、添光、穿波の諸老早朝より来会あつて仲々の盛況である。さて瀬津雅陶庵の席へ……

お掛軸は地獄草紙繪巻の残欠である。天下周知の国宝繪巻のナンパーワン、この手は原、益田兩家と安住院の所蔵と記憶するもので、この一軸は鈍翁旧蔵のものであろう。花入に渡金蘭伽羅盆と箱書ある華盆に青き竹五寸程に切りたるを置き、みづきと獅子王を挿して絶妙、さすがの耳庵も利休以來恐らくこの花にまさるは無しと、賞讃を惜しまぬ出来栄である。耳庵ならずとも皆この花には感服の聲、掛物、花器この座の空気に寸分の弛みなき整然と庵主の意気は將に超人の業と云うべく、末恐しきかな。床脇には鎌倉時代蒔繪長方香箱を莊り、水指は本地曲にて木の香をとどめ、茶入に根來金輪寺の愛品を用う。茶碗は如心斎作鈎彫花押ありて、頭巾と銘赤坂水戸幸さんより出版の「日本の樂茶碗」に登載あるもの、杓は大心和尚作鉄杓として如心の茶碗に取合う。釜は古天明。古九谷の目覺む程の名鉢に櫻餅を盛らる、寂仙宗匠のお点前を拜喫す。瀬津さんの茶はこの道の深奥を衝くもの。お正客は耳庵八十翁、因にこの日は釈伽入滅の涅槃會に相当。

明月谷は恒例の明庵氏

細野燕台翁の草庵

この席へは朝九時前に伺う、も早一先客既にあり燕翁の隣に從ひ本席に罷り通る。

の時代ある手付なれば水差に使ひしものか、寄付利休の文「さめが井の水」に因みて瑞鹿山の名水運び來てのお心有難く、財津大人のお点前によるお濃茶を粉引碗にて拜喫、杓は慶長二年丁酉正月三日造之、と簡書ある針屋京春の珍品、銘に「さんば」とあり、同席麥風翁の注に依つて三番叟よりならむと発言、庵主も膝を打つて同意せらる。

影青の花器に洋蘭を入れて新風を漾ぐは、好日会からではの新茶の湯でもある。茶器が春慶とありて漢作を傲ふ作意に播磨が愛らしい。大徳寺饅頭中の温み充分なると屬め給ふ菓器は徳治二年銘の茶桶。徳治二年丁未は鎌倉時代後二條帝の御代。

文化財保護委員会はこの人を得、日本文化の爲欣快を申し上げたい。この席この人の手練は縦横にして尽くるなく、来会茶友の歡喜は並ならぬものがあつた。

尚美庵は瀬津伊之助氏
茶の花の妙は天下一品

この席にお取合せの道具を拜見して、光悦会大師会と日本茶道の最高茶事に劣るものではないと、つくづく感心してしまつた。瀬津さんはこの前日まで日本橋のお店で風邪で休んで居られたので他所事とも思はず皆んなで心配して居たが、御本尊は病中既にあれこれ成算あり、今朝悠々と出陣方南翁に相對して一歩も後れじの信念に燃ゆる如き体である。

瀬津さんは私の最も畏敬する先輩であり知己である。瀬津さんの審美眼の優れた居る事は定評であり今更此所に吹聴の要は無いが瀬津さんの日常の居処

住吉の松ならねども久にして君とねぬのたりにけるかな

巻末らしく例の光悦方印は墨色鮮明なり、祖母饅頭の釘彫ある印花黄瀬戸釉の瓶に、紅梅と白玉を。淨久の寿老釜には前裕の清水が煮えて湯煙立ち、水器は遠州高取を、重ね餅の如き根來塗の茶器は平形の朱色愛らしく、組まれた茶杓は寫眞の銘ある文々作。溪に向ふ雀鳴に応ふ心。茶碗は五器と瀬津引出黒、主茶碗にてお淡を頂く。

席主は金澤の裏流茶人として知られ、月々御持出しにて好日会に御協賛は有難く、お國の菓匠森八襲の玉兎、墨形、松葉と赤白青の色彩美しき甘味を唐物の青貝の盆に風情よく、こぼしは加島屋の藏票ある唐金の時代のもの。その他一品一器に心を用ひ給ふ席主に敬意を表し素通りの寄付に名幅あるらしき氣配なれば退きて草庵に入る、燕老既に上氣嫌にて盃を重ね、先客は酒仙にして宗偏流の茶家川井穿波老なり、探幽の寿老を揃きたるに江月和尚の聲

隆々鶴頂の一老
杖を立てて閑笑眞眞の中

川井、細野兩老と鼎座磐若湯のもてなしを享く一盞たちまち紅顔、穿波老若返りの名薬ならぬ名幅を取り出し示さる。釈伽ねはん像に集う凡俗の姿はこれ如何に、春風ならぬ桃李吹く微風座を履ひて天上天下我は唯一夢裡の中。

瓜ヶ谷の山懐庵は
服部梅老の添釜

正客耳庵、お詰め添光老人の席に刺り込み入席、



雑報

- あしや釜 日展昨年度第四部審査員長野姪志氏は便利堂より、『あしや釜』を出版、昨秋好日会に使用の國宝楓鹿地文釜を始め名釜五十余を収載、五月中発賣予定。
- 飄阿作花籠の会 小森松庵理事推奨の同氏近作、凡そ五十点を四月中旬銀座黒田陶苑美術部に展覧の予定。
- 好日会春季大茶会 四月十二日、北鎌倉の各茶室を公開、高梨仁三郎、島山一清兩家始め、最明庵、雅陶庵、陶々庵にそれ〴〵懸釜と展覧に研を競う。
- 茶道研究会 暫く休会中の処、四月大会を齊藤利助氏の好意にて、柴庵、尚美庵を開放、谷川徹三、川端康成、松永耳庵三氏の鼎談という趣向にて新茶道文化を語るゝ予定。
- 加藤唐九郎氏 瀬戸市上水野安士(やすど)の地に陶窯を得られ、氏本来の陶藝に専念さると云ふこと、初窯の出来栄を如何、待たるゝことにこそ。
- 出雲崎に芭蕉句碑建立 良寛和尚生誕の地、新潟県出雲崎町、光照寺境内に同地佐藤耐雪翁主唱、大黒屋主人等の奔走により句碑建立のこと、蕭々として進む。
- 松永耳庵翁の肖像画 前田青町画伯は今秋の院展出品作として耳庵翁八十の寿を記念の肖像

- 鈴西を撰毫中。
- 藤沢寂仙宗匠 武藤郎獨樂庵に在りし処、この程田覺寺境内、樂々庵に移れら茶道々場を営まる。
- 大垣支部設立の気運 川瀬竹春氏努力に依り同市の愛陶家に依る支部の誕生は陽春四五月頃発足のこと、決る。

創刊号が出るまで………編輯同人

正月の理事會が龍泉堂さん方にて催され、その節瀧場一致の推挙により佐藤、久志、黒田の三名が編輯責任者として指名せられ、爾後折に觸れ會同、毎金曜日を編集打合せ日とし、よりよきものをと念願して努力、幸にも有尾佐治氏が閑職に在られる由、小山富士夫氏の熱心なる推せんもあり御助勢下され、菅原事務士、森印刷子と一丸となつて兎に角こゝに第一創刊号を出しました。不備の点は次々と改めて御期待に副いたく念じ居ります。

木麥風夫妻の額も見え三疊中板の席へ十客ヒザを寄せて。

光悦の歌繪巻の巻頭繪梅の地文ある料紙にて、紅にはふ梅の華今朝白たへの雪ぞ降りつゝ、の一首を掲ぐる床を背にして古芦屋梅地文の釜、熊川の大きき碗に土岐二三の杓とコマの茶器を組まれ替は逸翁の渡米土産として米國製のピカノ茶碗。

さて松永翁と添光老が話題を熊川に集中されて盡くるところなく、茶歴五十年に至る添光翁の茶ばなしは御相伴の面々も興味深きものであつた。逸翁土産の銘「木守」についての庵主の御説明も面白く、昭和の木守物語は別の期会に割愛して、一応この稿を終ることとする。貴重なるスペースを駄筆に綴りとりとめも無くお詫びを申上ぐ。次号以下大いに勉強致す所存。 二八二一六稿



平戸橋の陶茶

本多 静雄

愛知県は尾張国と三河国からなつて居るが、その國境に猿投山という標高七〇〇米ばかりの山がある。此の地方一帯が花崗岩の風化帯で、粘土、木節蛙目、磁砂が到るところで産出するが、特に猿投山は、これ等のものにめぐまれて全山が陶土だといつても過言ではない。その西北の傾斜地に赤津、瀬戸品野等の昔から製陶で名高い聚落がある。その東南の反対側の傾斜地には矢作川の上流にかゝる平戸橋やその下流のトヨダ自動車工場の在るコロモ市等の部落がある。

最明庵 慢語
器之成於心。而形於手者此爲上。循干繩墨。由干規矩。日出萬數。愈多愈下。蓋賢有餘者之勝於形有餘者。人亦不出此理。
細野 燕臺

山の北側、瀬戸方面の土質が陶土として優秀で古來広く利用されて居るのに対して、山の南側の平戸橋方面の土質は陶器材料として、誠に使い難く、乾けば収縮の度が大きく、焼けば曲るといふので、従来の製陶業者からは見捨てられて居た。そこへ戦争中陶藝作家で古陶の研究家としても名を知られて居る加藤九郎氏が賑察して来て、変つた土質、ひねくれた陶土を逆用して特色ある陶藝品を作り出した。次いで京都から作家河村喜太郎氏が誘

い藝術の動きが論ぜられ、囁れざると共に日本古來の作品、特に茶陶の研究も忽せにはせられなかつた。そこから話が進んで、皆んなで「お茶」を勉強しようということになり、捉われぬお茶、自由討論の許されるお茶、作陶に役立つお茶という勝手な注文から新茶道を標榜する藤沢淑仙氏に出稽古をお願いすることになつた。それには丁度私が以前在京中松永耳庵翁の手引で柳瀬山莊に寓して居た藤沢氏から、お茶を習つた縁

故があつた。平戸橋で作られる陶藝品は一度茶室で実際に使つて見てその適否が試された。新茶道のために役立つと思われる色々の陶器が試作せられた。ときには中に突飛なものも出た。電熱風炉や、運び出しに使う茶巾入れやら、また幾度も窯に入つて灰を蒙つて、てか／＼になつたエブタを風呂の敷板に使つて見たりした。また誰かが他所で手に入れて来た器物は、皆んなの前で試用せられて、忌憚のない批評が加えられた従つてここで行われたものは陶器を中心としたお茶で、私達は之を「陶茶」と称した。これらの結果を大方の人に見て貰おうという意味もあつた。廿七年二月銀座の黒田陶苑美術部で展覧会を行つた。

鎌倉立春会

三月廿二日、北鎌倉北大路富士山荘にて例会が催され、臨時参加者を加へ五十名に近く盛會であつた。御高齡の島田佳次氏、東京より参會せられ、竹内金平、佐羽総太郎兩翁と共に春の陽の暮れ行くのも忘れられ魯山人作備前初窯を觀賞せられた。二月の会は鎌倉梅の名所瑞泉寺にて大佛先生の御愛蔵の御茶盃拜見の會として催され、是亦今回に劣らぬ盛會であつた。

陶器の句

小村 塘雨

俳人岩永露菟。月斗門。昭和十四年五十六才にして歿。時事新報の記者、浜町の某料亭の番頭などやつたことあり、江戸つ子。晩年は俳句に没頭。「白味筆筒の露菟」と呼ばれ、何でも心得ていてあらゆるものを句の題材にした特異の存在で居た。陶器の句も澤山作つて居ります。そのうちから少し拾つて見よう。

- 火櫛の涼垢掛けり筆 露菟
- 春淺し暖炉の棚の齊盆土器 全
- 風呂吹に色繪摩の茶盃かな 全
- 利久忌や明月盃によめ茶汁 全
- 鹹や吳須の小皿に二三片 全
- 手炬に探幽皿を温めけり 全
- 抄羅一枝砧青磁の花入に 全
- 琅玕の一壺に被蓋遠棚 全
- あぜち模様の小碟に鮭の背賜かな 全
- 春寒う鳴る遊環や青磁瓶 全

類の句は新古数知れずありましよう、佳い句も澤山ある筈ですが、それは只一個の皿であり、茶碗であり壺であるに過ぎません。どのような皿か、どのような壺かということに言及して居ません。俳句は焦点をねらつたら他は思い切つて省略するのが常則としますから、又十七字では手も廻らないので、大抵の場合陶器の説明や描写まで行かずサラリと済ませるのが多いのです。俳句はそうしたものであり、それで大いに結構なのですが、「俳句分類」には向かないものもあります。

- 仁清や夏を焼き出す水茶碗 閨之
 - 五月雨や三日見つめし黒茶碗 成美
 - びいどろの盃いざや更衣 曲風
 - 冷麥や日本の知恵の南京皿 陸夜
 - 開香炉岩倉焼あり時鳥 貞之
- この五句は前の五句に比べると重点が余程陶器の方へ傾いて居ります。前掲露菟十句も同様。それだけの陶器に興味を持ち、こういう器だと断つて居ります。そこへ提出された陶器でなければならぬ、他物では代役は動かないという必然性を主張して居ります。これは愛陶家でなければ生れて来ない境地かと思ひますが、この類の句は今までにそう澤山はなかつたのではないでしようか。俳句と陶器、大いに通ずるものがあるようであり、もつと深い因縁を古くから持ちそうに思えるのにどうしたことでしょう。しかし近頃は俳句の視野が俄かに広くなり、もの、見方も随分と微に入り細に亘るといつた風になりました。重点を陶器に傾けることから一歩進んでそれに重点を置く、陶器の本体を直視しそのものと取り組むという句も追々出て来ましよう。なだらなが、吳須の色かかにかに美しいか、茶入れの肩が、茶碗のかいらぎがどのよう詩心を動かしたか等々、陶器の美を追及する、それは俳句に残された一分野であり、その角度からの名吟も期待し得ることと思ひます。或は既に出て居るかも知れません。



画 譚 坊 生

飛躍新日本画 価格について

斯界の総大將八十五翁大観はめつたに作品を出しません。玉堂の風景画は一般観賞家に迎へられ、全国隅々まで行き互り相愛らず需要は多く、美人画の深水和入も作品も多し、点では双壁といふ所でしょう、尺八位の横物で書き込まれたものは二十万以上です。且し深水和入の半額位でしようか。去秋五都展での花相場は四十万とか聴きました。是は例外です。立幅は需要の關係で割に安価です。日本画壇御三家と稱される筆頭は古徑でこの作者は信仰の対照とも言うべく極めて寡作の故もあり、一品々獲得の爲に総力を結集しあらゆる努力を傾けねばなりません。隨て価格も日本一この作者は御迷惑な事とお察し致して居ます。価格ですか、それは尺八横位のものなれば四十万位、色紙ですら近作は十五万位で賣買されて居ます。親彦は古徑に次ぎ親賞層に注目されて貴重品扱いですが、古徑の半額位でしよう。青柳は去年の三人展以來急に再吟味されまして、本来の線に到りつてあります。今まで余りにも香しくありませんでしたから、当然の歸結といふものです。親彦に迫る人気といふ所でしょう。土牛は古徑流に作品が少く、選筆家ですから一点を完成するは容易の業ではありません。門前催促客が市を成し、応接に大重です。口の悪い業者は「土牛百べん」と言う位にお百度参りするのです。値段は親彦級青柳の上でしよう。岳陵も永い冬眠でしたがこの頃は心氣一轉従来の不人気を一蹴して昨年始め頃から上昇して来ました。されど深水和入に及ばず七万位でしようか。(以下次号)

小林逸翁の歸朝 歡迎茶會



きょう北鎌倉でも雪はこん／＼と降る。二月二十一日の晝である。逸翁歸朝歡迎の会として、集いよる人々の外傘ぬぐ手にも雪が散つて土間でボン／＼と払うといった風景の中に、席に通つた面々は正客逸翁を始めとして、五島慶太、石井光雄、服部玄三、団伊能、梅澤嘯軒、田辺宗英、内本宗韻、齊藤寿福庵主、服部素庵に小生といつた顔ぶれ。今日は延命会の臨時会であるが、昌山一清、松永耳庵、老の姿を見せないのは一抹の淋しさである。が御正客逸翁は洋行以前に増した元氣で滔々とアメリカのテレビや映画の表情をぶちまけてのお土産。

「日本では出来ないが向うでは野外映画をやつていて家族連れで自動車に乗つたまゝ映画を見物し、聲は拡声器を間近かに借りうけてやるから至極便利だ」

「テレビは赤字でありながら株の方は上つているのに反して映画の方は赤字といつてもハリウッドは門前電線の手タラシ……」話は尽きない。

この席は朝吹氏の柴庵に新築附けたしの廣間で、床には法橋光琳筆にするところ大黒天の図で、大黒天が天高くもろ手を差上げているのは、逸翁歸朝双手万歳の意でもあろうか。青磁菊花生にさした牡丹の調和もすが／＼しく、加うるに硝子越しに雪景色は一刻々々とよくなつて客の眼を樂しましめるが、一番樂しめない人は御舎弟の後樂園主宗英老一人。

「この雪でケイリンは丸潰れじゃ……」

と頗る御不満顔である。珍らしく現れた石井積翠翁は大燈の語録出版の話を持ちきつて署名を取るのに忙しそう。懐石に入つてお正客の御健康に乾盃した。雪はますます降りしきつて休まない中を露地笠をかゝけて本席に通る雪中風情も滅多に出逢はざない好図である。本席尙美庵の床は、中峯和尚の墨蹟お掛物拜見に及ぶと元の至大四(西曆一三二一年)我國より求法渡航の僧、縁首座に向つて与えた梵朝送別の語である。松浦家傳來と承るが、本文十九行、幻住明本の墨蹟としては、歴としたものが少いだけにこれは中々見応えのある一幅しかも正客の歸朝に因縁せしめての御提示とは、重きが中にも慶祝をこめた墨蹟である。しかも中廻上代紗金の表装が中によくうつるのもこの幅の美であらうか、花生は古銅象耳、それに紅梅と獅子玉白玉をあしらつての興趣。香台は型物染付有馬筆なるも面白い。ふか／＼とした大徳寺饅頭を頂いて、嫁女俊子夫人の御ねりの濃茶一碗、御正客も御満悦の躰なるお茶碗は伯庵とて、例の雲烟文様が外に廻らず見込に附へた味のよきもの、銘を「月宿」と称して仙台侯伊達吉村遺愛の品、お茶道清水動閑の箱書のよしである。替の一

碗は一入の黒、休々齊箱にて銘を「曙」と申す。茶入は朝日春慶肩衝で色形ともにしまつた柳堂御物。茶杓は石州作の楳竹で艶やかに牙え、銘を「伏見」というは、伏見の竹にて作れる所以か。変つていて面白いのは建水で、伊部の古作、廡軒所持にて銘を大黒と名付けたるは大黒頭巾に見たてゝの意か。

「寿福庵も大分お茶気がすゝんで取合せがうまくなつたねエ」

とお正客の聲に、庵主いさゝか照れ味なるのも座興であつた。

拜服の後広間に退けば床には豊公の自筆消息の一幅が掛けてある。讀んで行くと小田原陣中より大政所へ宛てたる手紙で、その文中に「城百ばかり取り申候。……」小田原始めて城を渡し候間、命をたすけ云々」

と書かれていたのも面白いが、要は今太閤と云われている逸翁への歡迎に庵主が持ち出した最後の馳走であらう。相客の囁くように、まさか翁にこれから何処かの城をつとれとそそのかす謎では方々あるまい。最近に出版された逸翁自傳がお留守中の装幀であつて、氣に入らるので庵本にしようとしたのを庵主の肝煎で銘々に配られ、加うるに扉に翁の自署を加えられ、「逸翁自傳署名本」一冊を土産に歸途についた。北鎌倉の駅に出ると、田覺寺の杉の森に雪が覆いかぶさつて、えい／＼ぬ風情で相客二三氏と共にしばし佇立して眺め入つたことであつた。

田山方南 記



古陶心

山田 詰

季としては暖い雨の夜である。追いつめられた思いの陶窯も詰め終つて、孤り寝つと坐つている。静かな雨聲に包まれた部屋の中に、くさ／＼の古陶や拙作が並んでいる。

雪は山堂を擁して樹影深し
燈籠うごかず夜況々
しづかに乱映を収めて疑義をおもる
一穗の青燈万古の心

茶山の詩が泛んで来る。雪の夜ではなく、今は雨の夜である。詩人茶山の居室には、澤山の蔵書が積手れていた事であろう。陶工の私には乱映を収めて疑義を思ふ柄ではない。

身近くある僅かばかりの古陶、それも骨董価値の低

い、また残念物のそれである。然し、茶山の詩にも彷彿するような心持を感じたりして、自慰しても見たくなる。

常に心暖められるもの、一つに、高麗朝の黒釉扁壺がある。この黒釉扁壺は、K氏の玄園廬にながら置かれてあつた。時にはピアノの上に据えられてもいた。何処に置かれていても、美しさに心引かれた。所謂、堂々とした感じのものではない。端麗にとりすましたものでもない。チカに觸れられる親しみと、温か味を持つている。

■黒釉扁壺は醜醜で丸い壺を水挽きし、その両方からタメたものである。愛陶家の方々には、ア、あれかとすぐ想像されるものではない。特殊な博物館的存在を持つているとも言いがたい。

徑六に近い不均整な円形が、太鼓の胴を思わせるガツチリした胴の両面を領し、図太い高台の上に据り佳麗な口造りを持つ首がついている。

この形体の上に黒砂糠のような黒釉が、タツプリ施釉されている。久しく土中にあつた故か、釉山の光澤は失せてはいるが、それが却つて美味そうな肌味を持つている。高麗、李朝と永い世の變遷を、凝つと土中に忍んでいたのが、その境を醇出したことでもあろうか。押せば窪みそうな柔かい肌ではあるが決して玩弄を赦さない威と、田夫とも俱に胡坐出来る慈しみを持つている。世の浮きしづみに徹して悠々陽なたつぽこをしている翁のようでもある。老態れた姿では毛頭ない。所謂風雅人でも、斜視的方外人でもなく、限らない現世の活動力を蔵している者のようである。

かつて内山氏が、朝鮮陶磁には佛教的思想の裏付けがあつて「支」の世界を持つていると何かに書いたように記憶する。今その著が手許にないので確かでない。高麗朝においての佛教の侵は、肯首出來るが、末期から李朝期に入るに至つて、宗教的變化を持つて來たことも史実が語るようである。廣汎の朝鮮古陶に就いては云何する程の何物も私は持つていないが、暗影が必ずしも支とは云い難い。

たま／＼見る李朝陶器の中には、何処か虚無的な暗影を持つている。然し、支は虚無とは次元を異にしている。明、暗と対象されるところには支の世界はない。支はむしろ、明、暗を包む世界でもある。或は、明、暗を産出す世界と言ふ可きかも知れない。

黒釉扁壺の中には微塵の暗さもない。至極平明さと朗らかさを持つている。様々に工夫されたであろう色相が蓄積され、諸々の文様が黒釉の内に藏されている様に思われる。釉薬を発見する過程から言えば如上の言はたわいもない虚言であるには違いない。もつと簡単な化学現象であるとしても、斯様に見られない事もないのではなからうか。益子の赤薬と言ふ土に、土灰釉を入れて黒釉が出来ると言つたとしても、それが直ちにそれを使用する者に肯首出來る黒になるかどうか。簡単に必ずしも文字通りのものであるかどうか、その人々の内なるものに依つて外はない。

いま一つは鉅鹿出土の鉢がある。黒釉扁壺とは対蹠的な存在である。鼠色の胎土の上に、酸化アルミナ性を含有している土を化粧し、その化粧土を櫛目で自由に文様を描いている。鉢の形は滴閑に近い蓮

花の四分の二程の上部を剪取つたような姿である。これも鉄描の魚文や牡丹文などを櫛で割した鉢があるので、よく見られていることである。私はこの盃を見てみると、全く方位を異にしたような、法華堂の日光、月光菩薩像を想うのである。あの二菩薩像をおがむ時、まづ私の心に打つて来るのが、合掌の御手である。お顔だの衣紋だの、否々、お姿全体から、総合的にも部分的にも、そんな言分がすでに馬鹿賢たことではあるが。合掌の御手が私の魂に迫る事も事実である。指頭まで行きわたる脈々の鼓動が、おのずから私の内に感ぜられる。宝珠の様な両の御手がふくよかに先づ合つている姿に、蓮花を想うのは私孤りだろうか。鉦鹿出土の鉢から二菩薩像を聯想するのも、その御手の線と鉢に通うものを感ずるからでもある。法相華、蓮花文様は支那陶磁、唐紙などにも見て来たが、開荷を思わせるものに、定窯、刑定などの鉢、蓋などがある。また自由奔放な蓮花の文様を見る。鉦鹿出土の鉢と荷花との聯想は、私の白日夢ではあろうが、無縁のものとも言い切れない気もする。

高麗黒釉扁壺と、宋窯鉦鹿出土の鉢とは、昼夜、私を視つづけている。私が眠つている時も、仕事場でロクロしている時もみつづける。この二古陶は全く異つた世界を表現しつゝ、第一の世界を物語つている。否、一如から産れ出た双生児にちがいない。扁壺は「玄」の世界を、鉦鹿出土の鉢は「光」を表象していると言えよう。総てを慈しみ抱擁する姿を現わしているのに反し、巍然とした端麗さに、美醜識別の激しさを示している。

天地未分の混沌たるなかに、美悪、美醜が一に融合してみる世界、白日下に晒されて総てを現わした世界、俱に母胎を同じくするのではなからうか。久しい祖先の遺産が血となり肉と育てられた漢民族の嬰兒であり、高麗文化の地下水を汲んだ両者であると思う。

會費と雑誌について

支部の一ニヶ所から協会の雑誌と会費を別々にしてもらえないだろうか、との問い合せがあり、これに對してはもはや返事を差出した事でおわかりの事と存じます。所が「日本美術工藝」誌主幹加藤一郎氏がその三月号の編集後記で「協会が機関誌である本誌の購読を会費に結びつけて会員に強いたこと、その不合理は絶えず地方支部会員から訴えられた。本誌でも協会当局に忠告したが、遂に容れられなかつた。」とどえらく誇張した文章を書いて下さつたので一言をこれに對して弁明しておきたい。社団法人日本陶磁協会は、雑誌販賣業の団体ではないことは、加藤氏もかつて協会の役員であつた。だから定款は讀んで居られるだろうし、こんなこと位は万々御解りの事と思つたのだが「日本美術工藝」を二年有半に「機関誌」とさせていたのだから、それを会員へ配布することは当然のこと、会員に強いたことは一度でもあり様がない。会員である以上機関誌が会員の手許に行くのはあたり前、若し行かなかつたら、むしろ違反であることは会則を見れば一目瞭然なこと申す運もない。又その費用の大半が会費

徒らに狭い所謂自我の殻に籠つて、見新しいものと腐心する現下の私共に、大きな啓示を与えて呉れていると思われる二古陶を視入りつゝ、妄想を深めて行くことである。(京都住 陶藝家新匠会同人)

によつて賄われていることもあたり前の話である。日本美術工藝社は雑誌販賣業として以上の定価をつけてどしどし売つていくことに對して、先に云つたように日本陶磁協会は雑誌販賣業ではなく、社団法人の陶磁研究団体組織である以上、その研究の發表の機関誌が、会員に配布されるのは当然である。だから機関誌と会員の会費と云うものは切りはなせないものである。協会が代理部と云う別の組織を設置し、そこで雑誌を販賣する場合は自から別の話である。随分いゝ名案のつもりで加藤氏は云い出された様だが、見当異いも甚だしと云わねばならない。「協会が地方会員の会費に依存しようとする方針が決して協会を大きくも重くするものではない理由を重ねて忠言したい」とどうも甚だ迷惑な御忠言で恐れ入る。重ねて申上げる。

協会は社団法人組織であつて会員によつて組織されているもので、従つて会員の会費で組織は賄われているので会費が入らねば協会は成り立たないこと申上る迄もない、会員から会費が入らなければ大きくも重くもなりようがない。一言お禮に申し開きをしておく (佐藤生)

「陶説」発行記念

繪画・陶藝展

協会機関誌「陶説」発行について諸先生方の御賛同を得ましてその記念小品展を開催する予定であります。追つて五月号にくわしく発表いたしますが、本号の切日までに御賛同いたして諸先生芳名左の通りです。

- 安田 靱彦先生
- 前田 青邨先生
- 梅原龍三郎先生
- 川合玉堂先生
- 伊東深水先生
- 石黒宗麿先生
- 荒川豊藏先生
- 加藤唐九郎先生
- 加藤土師萌先生
- 金重陶陽先生
- イサムノグチ先生
- 北大路魯山人先生
- 板谷波山先生
- 富本憲吉先生
- 河村喜太郎先生



左記の品、現所有者の手から行方不明になつておりますので、御存知の方は甚だ恐縮ながら協会宛お知らせ賜り度く切にお願い申上ります。
古瀬戸狛犬一対

- 高さ凡 六寸五分位
- 釉薬、鉛黒色、古瀬戸釉
- 一對共耳一部かけ、鼻、口共すれて釉薬めくれあり
- 箱、桐箱にて内部一對はめ込みとなる

會員名簿

- | | | |
|----------|-----------|---------------|
| 理事 伊藤 祐淳 | 顧問 尾崎 洵盛 | 目黒区柿木坂二七 |
| 磯野 信威 | 奥田 誠一 | 台東区谷中清水町一〇 |
| 大屋 敦 | 小林 一三 | 大阪府池田市建石町 |
| 小田 栄作 | 団 伊能 | 目黒区緑ヶ岡二三六四 |
| 加藤唐九郎 | 松永安左衛門 | 港区日本橋西町一 |
| 加藤土師萌 | 理事長 梅澤彦太郎 | 中央区銀座東二ノ十一 |
| 久志 卓眞 | 日本醫事新報社内 | |
| 黒田 領治 | | |
| 小山富士夫 | 理事 伊藤 祐淳 | 渋谷区松涛町二三 |
| 小森 新一 | 磯野 信威 | 新宿区柏木町一ノ六七 |
| 佐藤 進三 | 大屋 敦 | 大田区田園調布三ノ六四七 |
| 篠原三千朗 | 小田 栄作 | 大阪市東区伏見町二ノ二一 |
| 陶守三思郎 | 加藤唐九郎 | 名古屋市中区外守山町翠松園 |
| 瀬川 昌世 | 加藤土師萌 | 横浜市港北区日吉町二三七 |
| 瀬津伊之助 | 久志 卓眞 | 中野区小瀧町五三 |
| 田中作太郎 | 黒田 領治 | 港区新橋一ノ八 |
| 田 豊治 | 小山富士夫 | 鎌倉市二階堂八〇九 |
| 内藤 豊治 | 小森 新一 | 武蔵野市吉祥寺二六七四 |
| 中村 一雄 | 佐藤 進三 | 目黒区三谷町九六 |
| 中本 守 | 篠原三千朗 | 大田区田園調布四ノ一七四 |
| 廣田 照 | 陶守三思郎 | 岡山市内山下 |
| | 瀬川 昌世 | 文京区弓町二ノ三四 |
| | 瀬津伊之助 | 鎌倉市山ノ内初台六三三 |
| | 田中作太郎 | 渋谷区代々木初台六三三 |
| | 田 豊治 | 台東区上野公園国立博物館 |
| | 内藤 豊治 | |
| | 中村 一雄 | 品川区大井金子町五八八〇 |
| | 中本 守 | 港区赤坂仲ノ町三水戸幸内 |
| | 廣田 照 | 鎌倉市小町四三七 |
| | | 中央区日本橋通一ノ壱中居 |

- 堀口 拾巳 新宿区下落合二ノ六〇四
 満山 順吉 中央区京橋二ノ十一
 森村 義行 大府南内郡道明寺町
 保田 憲三 中央区日本橋通一丁目
 浅井竹五郎 千代田銀行内森村商事
 齋藤 利助 大阪市阿部野区阿部野筋八
 磯崎 保二 名古屋東区東芳野町一丁目
 田島 正雄 鎌倉市山ノ内一三二〇
 濱口 雄彦 伊丹市昆陽町岩田十三ノ九
 桂 又三郎 渋谷区南平台町四六
 佐藤 雅彦 岡山市東中山下三九
 高橋 城皓 大府市天王寺区茶臼山
 時岡 二郎 今治市常盤町八丁目
 藤岡 了一 新潟市学校町通三番町
 福島 良美 京都市東山区東山七條
 京府博物館
 別府市行合区立花通三丁目

- 津田 勝五郎 芦屋市山背屋町四九
 戸田 大三 神戸市灘区篠原北町三
 戸田 鏡之助 大府市東区伏見町三ノ一六
 長谷川巳之吉 藤澤市鶴沼六九一
 松村 四郎 杉並区上荻窪一ノ二〇三
 水野 成夫 杉並区永福町四二五
 南 喜一 杉並区永福町二二七
 室瀧 次郎 藤澤市鶴沼下藤谷三〇三二
 安田 親彦 神奈川県大磯町東小磯
 山田岸太郎 神戸市東灘区住吉町鍋島
 吉川 英治 東京都下西多摩郡吉野村
 渡辺 充枝 中央区銀座一東洋美術館
 渡辺 増雄 神戸市生田区三宮町二ノ六

- 石川 宗幸 大田区徳持町二ノ五
 井上 昇三 都下小金井町小金井一四八二
 今泉 吉郎 中央区銀座六ノ尾張町ビル一階
 飯田 孝次郎 中央区京橋八号地一ノ三日月内
 伊端喜代志 港区芳公園八号地一ノ三日月内
 磯川 宗美 中央区日本橋筋野町四ノ三
 磯貝 房枝 大田区久ヶ原町五九八
 岩田 吉博 横濱市港北区岸根町五八ノ六
 井上 良齊 横濱市南区永田町一五三八
 伊藤 毅 横濱市港北区高島台四五
 今川 義利 横濱市港北区箕輪町一〇八
 伊端喜代志 中央区銀座西六ノ四
 五十嵐 健二 山形市横町
 市村 兵衛 富山県福光町六七九一
 井村 勇吉 愛知県豊田郡西尾町花木三ノ八
 石黒 佐一郎 京都市東山区御地上ル上白山町
 今井 康弘 横濱市西区東ヶ丘二丁目
 海野 幸世 桐生市宮本町一三二五
 上村 宇多 杉並区下高井戸一ノ七九
 宇野正之輔 台東区谷中坂町八八
 宇佐美信子 世田谷区経堂町三九五
 内山 浩亮 福岡市浄水通四四
 内田 竹蔵 静岡県二俣町
 内田 二夫 福岡県山門郡大和村字塩塚
 江平 達哉 中央区日本橋江戶橋二ノ一
 遠藤政次郎 千代田区永田町二ノ五七
 江口 治 武蔵野市吉祥寺二六五八
 榎本 重雄 杉並区堀ノ内一ノ六一
 大倉 一 中央区駒込西片町一〇イノ一
 岡本 孝平 文京区千光前町一四
 大場 孝三 鎌倉市山ノ内八五九
 小久江利治 神奈川県逗子新宿二一八八
 太田満寿枝 杉並区成宗一ノ二六
 横濱市中区根岸旭台二一

支部だより



志野・織部・黄瀬戸
展の魅力

浅井竹五郎

去年の秋の東海支部大会を、東京の志野、織部、黄瀬戸展を、名古屋まで延長してもらったこと、プランを考えていたが、スポーツその他私的身辺、とても多忙の日が続いたので、とうとう新春に持ち越すことになった。

そのかわり、愛知、岐阜という、この焼物の地元というので、一つ東京にまげぬ大展覧を、何とか地元元勢の力という気持ちで、古美術商峯澤武夫君に話すと、何とか力を入れて見ましようとの若い元気に満ちた話。

東京の本部と幾度かの文書の往復、峯澤君の大活躍が続いて、いよいよ一月の十八日曜日に、名古屋の徳川美術館で、開幕ということになった。最初は支部大会の日だった一日というのが、地元の新開社の美術記者や、徳川美術館の希望もあってとうとう前後八日間という会期になり、東京の十数点の外は、全部、名古屋岐阜地方の名家の蒐藏品で無慮百八十点という大量のほり、好天気をついにたお陰もあつて前後を通じて、観覧者一千五百余人実に、私が陶磁協会の東海支部を引きうけて以来のレコードが、あらゆる方面に記録されることになった。

当日の講演は、瀬戸出身のゆかりの深い加藤土師崩氏におたのみして、『織部時代の陶磁器』という題で一時間四十分、さむい美術館の講堂に七八十人が満員の休でその陳列室に鑑賞家に入れぬ人が百人

も所られたとの話。

その後の列品解説を、加藤、佐藤両氏の二組にかけて、約一時間も二つの集団が、黒山になつていたのは、主催者としては、嬉しい風景を見せられたものだった。

陳列品は別紙の目録でおわかりと思うが、東京から持来された「峯紅葉」に匹敵する「菊」が、よく中央のケースに並んだ外、織部筋茶盃の「菊」、黄瀬戸旅枕の花生、などが目立ち、岐阜古陶会出品の黄瀬戸六角の杯が十個も揃つて居たのも目を引いた。いづれを見ても一くせある名品百八十余点に、鑑賞者の足は長くといわれ、最近の美術古陶磁の隆昌を一層この機会に拍車をかけた結果になつたとも感ぜられた。

その夜、八事の八勝館で両講師中心の懇話会も、千円の会費で三十余人も集つたことも珍らしいこと、話はめん／＼と盡きず、数人の人々は、とうとう八勝館に泊られたとのニュースもあつた。荒川豊蔵加藤唐九郎など、その道の大家が居ては、話はずむのもさこそと思つた。

あとで、来客者名簿を見ると、岡山、京都、大阪静岡方面から二十数人の知名の来観者のあつたことも、地元としては、感謝に堪えぬ次第、これなら協会本部の期待する会員増加運動も成功疑なしと思つた。当日の入会者だけでも十余名、東海支部は百七十五名の会員となつたのも、心嬉しくことだつた。

中心が熱が高くなれば周辺もあつくなる。それはこの志野、織部、黄瀬戸という美濃古陶流行の魅力もあつたことと思うが、終戦後七ヶ年、世の中も落ちついて、火災ビンの影が薄れて、窯辺向をやく炎の力の強く人心を打つことになつたわけか、来会者中、若い女性が多かつたことも、心ときめく一つでもあつた。(昭和二十八年一月卅一日金澤行の汽車で窓外の雪景色を見ながら、乱筆御容赦)

新刊 明の染付と赤繪

日本に現存する中国明時代の染付の名品を網羅した左記一流執筆者の研究を附し厳選せる印刷技術による豪華限定本です。印刷事情のため出版を延期して居りましたが、念々出来ましかたから、御早く御申込み下さい。

編者 協陶磁協
 定価 一、二〇〇円
 (会員一割引)

原色 六図
 単色 五十余図
 本文 奥田 誠一
 尾崎 洵盛
 内藤 匡
 小山富士夫
 久志 卓眞
 上質特製本
 図版解説 久志 卓眞
 B5版 上質特製本
 定価 一、二〇〇円
 (会員一割引)

- 左記手持ちの残本少数ありますから売切れぬ内に御申込を願います。
 - 古備前 昭和二十七年十月発行 定価 三〇〇円
 - 桂又三郎著伊部南大窯趾発掘資料 昭和二十七年九月発行 定価 四〇〇円
 - 東京美術青年会編 美術手帳 定価 三〇〇円
- 申込所 東京中央区銀座東二ノ十一
 日本陶磁協会
 電話 東京 56 三三三
 振替 東京 八四九

日本陶磁協会規約
趣意書

支那では昔から「陶により政を知る」と云われ、一國の爲政者に傑出した人材が出て國家が隆々たる時代には陶業も栄えました。このことは東洋史上に見る國家の消長と、その時代の陶器の性格を参照して見るとき首肯されるのであります。

陶器の趣味というものは何か大衆から遊離した金のかかる贅澤なように思われ勝ですが、吾々が東洋史の流れの中に住む以上、その政治的意義を知ると同時に祖先がこれを作り、またこれを愛用してきた東洋の陶器の歴史について識ることは焼物が人間生活と切り離せないものだけに非常に深い意味があるのであります。

この意味で吾々は古陶だけでなく新陶及び新作家の養成助長に力を致し地方にうずもれた有為の作家を引立てたく思います。かくて吾々はこの世界に冠たる東洋の新古陶磁器を鑑賞研究助成することに大きな誇りと喜びを感じるものであります。出来るだけ多くの入達とこの欣を頌合するために愛好者が集つて昭和二十年一月日本陶磁協会は結成されました。昭和二十五年文部省より社団法人の認可も得られ活動に便宜が与えられますので、これに力を得一層努力して会を発展向上させたいと思ひます。

それにつき次に具体的に会の目的、事業、企図、規定、概況等を記しましたから御参照の上御協力を御願ひいたします。

日本陶磁協会の目的と事業

- 一、文献資料、図書及び参考品の収集保存
 - 一、会報雑誌、研究調査報告書その他圖書の刊行
 - 一、海外へ我國陶磁器の紹介
 - 一、新作家の養成助長補助
 - 一、その他の目的達成に必要と認める事項
- 生活文化発展のため陶磁工業に関する調査、研究指導助成ならびに海外への紹介を目的とする。

- 一、古窯跡の調査発掘
- 一、研究会、講演会及び展覧会の開催

会員規定

- 一、本協会の趣旨目的を賛同し、定款の定める事業に協力援助する個人若しくは団体によつて組織するものとす。
- 二、会員は定款の定める所により左の三種とす。
イ、正会員、毎年会費千八百円を納入すること
(但年二回に分納も可)
ロ、特別会員、一口金壹万円一口以上を贈出すること

- ハ、名誉会員、この法人に対し特に功勞のあつた者のうちから理事会で推薦す
- 三、各員は次の特権を持つものとす。
1 本協会の研究会、展覧会、講演会に出席することが出来る。
(但、所要の実費を支払うものとす)
- 2、本協会の研究機関誌陶説が毎月無料配布される。

支部所在地

- | | |
|-------|------------------------|
| 仙台支部 | 仙台市元常盤町(仙台市公会堂内文化視光線内) |
| 新潟支部 | 新潟市学校町通三番町(時岡二郎氏方) |
| 金澤支部 | 金沢市下本多町(北園会館方) |
| 東海支部 | 名古屋市中区東芳野町一丁目(浅井産業方) |
| 岡山支部 | 岡山市内山下(陶守三思郎方) |
| 山陰支部 | 米子市塩町(深田雄一郎氏方) |
| 愛媛支部 | 今治市常盤町八丁目(高橋城時氏方) |
| 高松支部 | 高松市天神前一五八(吉永加次夫氏方) |
| 丸亀支部 | 香川県丸亀市松屋町(佐藤藤生氏方) |
| 予土支部 | 愛媛県宇和島市元結掛一九〇(田中愛信氏方) |
| 福岡支部 | 福岡市平丘町八二(田中丸善八氏方) |
| 豊前支部 | 福岡県築上郡八屋町(渡辺栄一郎氏方) |
| 中津支部 | 大分県中津市(白木原氏方) |
| 大分県支部 | 別府市行合区立花通三福島良美氏方) |
| 福島支部 | 福島県飯坂温泉湯野(佐藤盛氏方) |

日本陶磁協会編集

名陶スライド 頒布目録

原色 幻燈用

支那篇 (各十枚一組)

- 上代 第一集
- 1 彩色土器
 - 2 黒陶明器人物
 - 3 黒陶明器馬
 - 4 黒陶明器瓶
 - 5 漢口胎漆器
 - 6 漢明器緑釉家鴨小壺
 - 7 漢明器緑釉鳥
 - 8 六朝青磁四耳壺
 - 9 六朝越州青磁博山爐
 - 10 六朝越州青磁熊形小壺
- 唐時代 第一集
- 1 越州德清青磁水注
 - 2 越州青磁手付鳥口水瓶
 - 3 越州青磁椀人物飾壺
 - 4 越州天目和銀型文大壺
 - 5 邢窯白瓷田面碗
 - 6 三彩麒麟
 - 7 三彩瑞花文大鉢
 - 8 三彩鸞頭壺
 - 9 三彩人物立像
 - 10 三彩人物半身
- 唐時代 第二集
- 1 三彩獅子
 - 2 三彩白馬
 - 3 三彩馬
 - 4 三彩鸞頭手付瓶
 - 5 三彩綠地花文瓶
 - 6 三彩藍線細壺

宋時代 第一集

- 1 邢窯白瓷鳳首瓶
- 2 越州窯黒釉(木邦出土)
- 3 越州窯青磁合子
- 4 洪州窯茶褐釉盤
- 1 定窯紅磁金彩文碗
- 2 宋三彩蓮花文枕
- 3 青磁水注
- 4 磁州窯白地撒落牡丹文水注
- 5 磁州窯白地黒花文壺
- 6 磁州窯緑釉地黒花文瓶
- 7 磁州窯練上手碗
- 8 景德鎮窯青白磁水注
- 9 南宋官窯青磁鉢
- 10 南宋建窯油滴天目

宋時代 第二集

- 1 修内司官窯下燕花生
 - 2 宋官窯筒形花生
 - 3 龍泉窯鳳凰耳花生 銘萬曆
 - 4 定窯白磁鉢
 - 5 定窯白磁手付水瓶
 - 6 越州青磁手付水注
 - 7 磁州窯撒落黒龍文梅瓶
 - 8 磁州窯撒落白花文枕
 - 9 磁州窯撒落黒魚草文碗
 - 10 均窯摺座三足盤
- 明時代 第一集
- 1 宣德染付水草文盤
 - 2 明初赤絵草花文鉢
 - 3 嘉靖赤絵草花文方壺

明時代 第二集

- 1 龍泉窯鈔色斑文瓶
 - 2 明初龍泉窯青磁共蓋瓶
 - 3 成化染附蓮花文瓶
 - 4 成化豆彩唐草文梅瓶
 - 5 正徳白磁緑彩龍文鉢
 - 6 同高合裏鉢
 - 7 嘉靖金欄手碗
 - 8 万曆赤絵草花文蓋物
 - 9 万曆赤絵龍鳳唐草文蓋物
 - 10 吳須赤絵牡丹文壺
- 清時代 第一集
- 1 康熙白磁釉裏紅魚文馬上盃
 - 2 康熙白磁釉裏紅雙果文皿
 - 3 康熙五彩花鳥文花瓶
 - 4 康熙白磁釉裏紅瓶
 - 5 康熙白磁釉裏紅瓶
 - 6 康熙白磁桃花紅太白尊
 - 7 雍正黒地緑彩南天水仙文皿
 - 8 雍正粉彩牡丹文瓶
 - 9 雍正五彩女人鹿車圖盤
 - 10 乾隆粉彩梅花文皿

清時代 第二集

- 1 乾隆白磁釉裏紅魚文馬上盃
 - 2 乾隆白磁釉裏紅雙果文皿
 - 3 乾隆五彩花鳥文花瓶
 - 4 康熙白磁釉裏紅瓶
 - 5 康熙白磁釉裏紅瓶
 - 6 康熙白磁桃花紅太白尊
 - 7 雍正黒地緑彩南天水仙文皿
 - 8 雍正粉彩牡丹文瓶
 - 9 雍正五彩女人鹿車圖盤
 - 10 乾隆粉彩梅花文皿
- 日本篇 (各十枚一組)
- 古代中世 第一集
- 1 繩文土器

近世初期 第一集

- 1 鎌倉時代信樂大壺
- 2 室町時代信樂罍
- 3 鎌倉時代瀬戸四耳壺
- 4 鎌倉時代瀬戸撥落壺
- 5 鎌倉時代瀬戸彫花四耳壺
- 6 鎌倉時代瀬戸彫花壺
- 7 鎌倉時代瀬戸彫花壺
- 8 鎌倉時代瀬戸印花文壺
- 9 室町時代瀬戸茶盤
- 10 室町時代瀬戸天目

美濃系 第一集

- 1 黄瀬戸鼓形花生
 - 2 黄瀬戸輪花鉢
 - 3 黄瀬戸半筒茶盤
 - 4 志野橋筋茶盤
 - 5 志野香合
 - 6 風志野鳥絵鉢
 - 7 瀬戸黒茶盤
 - 8 青織部馬人物絵鉢
 - 9 同高台圖
 - 10 織部平向附
- 唐津 第一集
- 1 絵唐津松絵大鉢壺屋ノ谷窯
 - 2 絵唐津筒茶盤藤ノ川内窯

頒布各一集 (十枚)

- 3 絵唐津藤絵皿阿房ノ谷窯
 - 4 絵唐津唐草壺
 - 5 絵唐津秋草壺
 - 6 斑唐津人角皿
 - 7 斑唐津くい呑
 - 8 朝鮮唐津一重口水指
 - 9 本手瀬戸唐津茶盤
 - 10 同高台圖
- 金二〇〇〇円
- 申込と同時に送金のこと、約一週間にてお届けいたします。

幼燈映寫機御入用の方には日本が一番すぐれた左記理科学精機会社製をおすすめします

(送料六〇〇円)

マスター、ルツクス型映寫機 (モーターファン冷却装置付 五〇〇W、ケース入)

二四、八〇〇円

東京都中央区銀座東二の十一
社団法人 日本陶磁協会
振替口座東京八四四九九番



理事の榮

○長い間出版社創藝社の都合でおくりまして「明の染付と赤絵」がようやく三月十三日に出来上りました。予約の方々には何とも申譯ないことですが、もはや図録を見ていただいていることと存じますが満足していただけるかと存じます。

○総会が毎年四月に開かれますが地方会員は御出席になりにくい方が多いことですが、その場合は必ずお忘れなく往復ハガキの委任状を御出し下さいますようお願い申し上げます。

○三月号で承らく御世話になりました「日本美術工藝」とさようならすることになつて一涙の淋しさがありました。新雑誌発行という希望に張り切つて、僅か一ヶ月の準備期間で曲りなりに会員へお送りすることになりました。号を重ねるに従つていゝものに仕立てて行きたいと存じます。元東洋陶磁研究所の有尾佐治氏が長い空白からカムバツクして編集を手傳つてもらつていますので協会の機関誌の面目を開拓して行きたいと思つて居ります。

す。二号三号は多分普通号で進み四号で特別号にしたいと念じています。三月陶報でお知らせした図録「織部」を「陶説」春の特別号に切りかえることに編集会議で決定しました。すばらしい織部号が出来上ります。寫眞八十枚程で写眞の編集は終りました。あとは加藤理事の記事をまづばかりです。

○本月初号は尾崎顧問、久志、保田、小森、満岡四理事の出陣で客員からもそれ〴〵、原稿をいただいで感謝しております。尾崎顧問の「陶説」は期せずして題名が同じとなつて第三号位この解がつづきそれより本論に移る由です。

二号には米内山氏、小山理事の論文、その他隨筆及び啓蒙記事に力を入れたいと考へています。

○地方支部よりの消息が少いが、追々多くなることと思ひますが、どしどし〴〵の消息、又人事のことどしどし〴〵お送り下さい。(佐藤生)

成化の陶磁の稿について

編輯責任者として最初の号を期日に間に合うようにという念願から、他に稿が集らなくても何とか出し得るようにならうという念願から、長篇を予備したのであつたが幸い皆様の御協力によつて、稿も集り私の稿も中断して載せざるを得なくなつた。そのため原色版や図版と稿の緊密な連絡が欠け、読者に申譯ない不徹底な稿となることを避けるわけにいかなくなつた。甚勝手ではあるが、私の稿に限り来月号の図版文章兼ね合せて一休のものとして御読み願ひ度い。本号の原色版の説明は来月号になることを御

諒承願う。(久志)

○小山富士夫理事は外務省の依頼にて外地大使館を飾る陶磁器調達の為諸陶藝作家に呼びかけこれが完納を期する。依囑作家は井上良齊氏他十数作家。(黒田)

○国立博物館陶磁器講座開く

四月二十九日小山富士夫氏により朝鮮の陶器について、英國大使館アイケス氏は「東洋陶磁の収集」について。三十日田中作太郎氏は「日本上代のやきもの」を、魯山人氏は「名人藝」について光悦仁清その他を。三十一日谷川徹三氏の茶碗のはなし、中川千咲氏は日本近世の陶磁を。

○無形文化財諸匠の特別展観

国博表慶館に於て三月末日まで、宇野宗太郎氏の色彩磁、加藤唐九郎氏の織部、荒川豊蔵氏の志野、石黒宗鷹氏の宋窯写し、金重陶陽氏の備前燒、今泉今右衛門氏の鍋島手の諸名匠漆藝の松波保眞氏等の作品を公開、何れも秀麗神技を示さる。

○横浜コレクション特別展

四月十日から五月末日まで故横河民輔翁寄贈の「東洋古陶磁特別展」を開催する、於国立博物館。(黒田)

昭和二十八年三月三十一日印刷
昭和二十八年四月 一日発行

編輯兼 梅澤彦太郎
発行所 京文社印刷所
印刷所 東京都中央区銀座東二の十一
電話(京橋)56二〇五七
振替東京 八四四九九

刊 創 祝

蕪木桃葉庵 大場宗成 德澤成信 杉下利夫 齋藤利助 大屋清敦 汲野風船 磯部玄三 服部清次 室藤次郎 遠藤吟甫 須藤宗次 梅澤彦太郎 菅原通彦 浜口雄彦 篠原三郎 森村義行 宮川竹馬 宮川以登 中村波奈

後藤增平 田邊仁三 高梨三毅 伊藤極友 京極康成 川端康成 吾妻徳穂 三井高龜 大倉三郎 松方信三 御手洗信脩 今井正之 服部正次 大塚健一 山内新一 小森新二 久米新二 圓米新二 吉田孝太郎 瀬川昌世

蕭山順吉 廣田不齋 飯田勝郎 伊端喜代志 竹内善次 瀨津伊之助 吉田幸之助 金ヶ崎二郎 渡部迪 中野武四郎 眞野武毅 圓城寺次郎 岡本達夫 田畑英治 小川敏夫 荻原房造 西尾重樹

(御署名順)

古美術品



雅陶堂

瀬津伊之助

東京都中央区日本橋通三ノ三
電話千代田(27)九六三〇番

古美術茶道具

平山堂

東京都中央区銀座西六ノ六
電話銀座(57)3013番

中國古代美術

尚雅堂

京都市中京区寺町通御池下
(本能寺前)

電話上③六二七八番

東京都中央区銀座西六ノ六

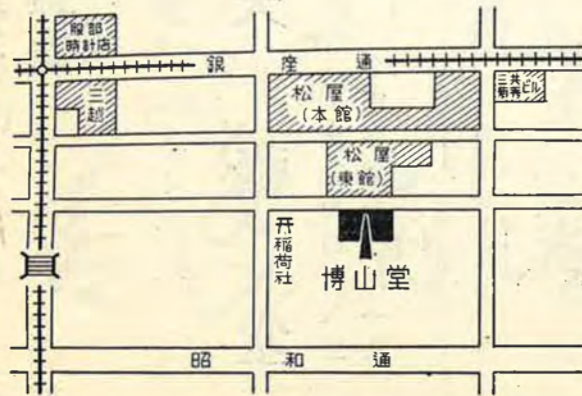
(泰明小学校前みゆき通り)

電話銀座(57)〇一〇三番

樂しめる美術品を
おすゝめする店

博山堂

銀座三ノ五
電話京橋(56)二六四一番



会珠文

京橋

下谷

永田町

築地

駿河台

三軒町

竹
萬三平

電話(56)七〇五二

同
花

電話(83)五五〇九

山の茶屋

電話(58)〇六五六

壺
扇

電話(55)〇三六五

吉
有

電話(25)〇七六一

八百善

電話(58)〇五三

西洋古美術

西 欧 古 陶
時 代 ガ ラ ス
舶 来 家 具

港区芝公園八号地ノ一(都電増上寺前)
電話 芝 3 1. 2 5 番

三日月

彌生画廊

銀座西七ノ五
並木通彌生館ビル
電話銀座(57)三三二〇

古美術茶器

天祿堂

岡山市東田町八二
電話岡山三四一八

古美術
古陶磁

不言堂

坂本五郎
東京都中央区京橋一ノ一
電話京橋(56)三七九二番



東京・銀座・新橋
 電話(57) 新橋店 3223番
 銀座店 3490番

六十年の信用

月掛の保険

太陽生命

定評ある臨牀醫家の好伴侶

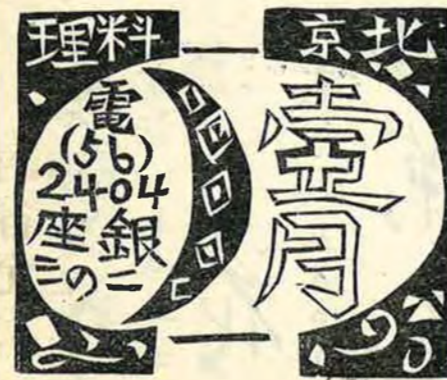
週刊・総合醫學雑誌

日本醫事新報

清新發刺・内容充実

B5判・84頁 定価一部 50円 送料 4円

東京都中央区銀座東2丁目11番地
 TEL 京橋(56)3458 振替東京25171 日本醫事新報社



すー春

電話千代田(27)二八八〇
 日本橋通三丁目五

古美術 工藝品
貴石 寶飾品

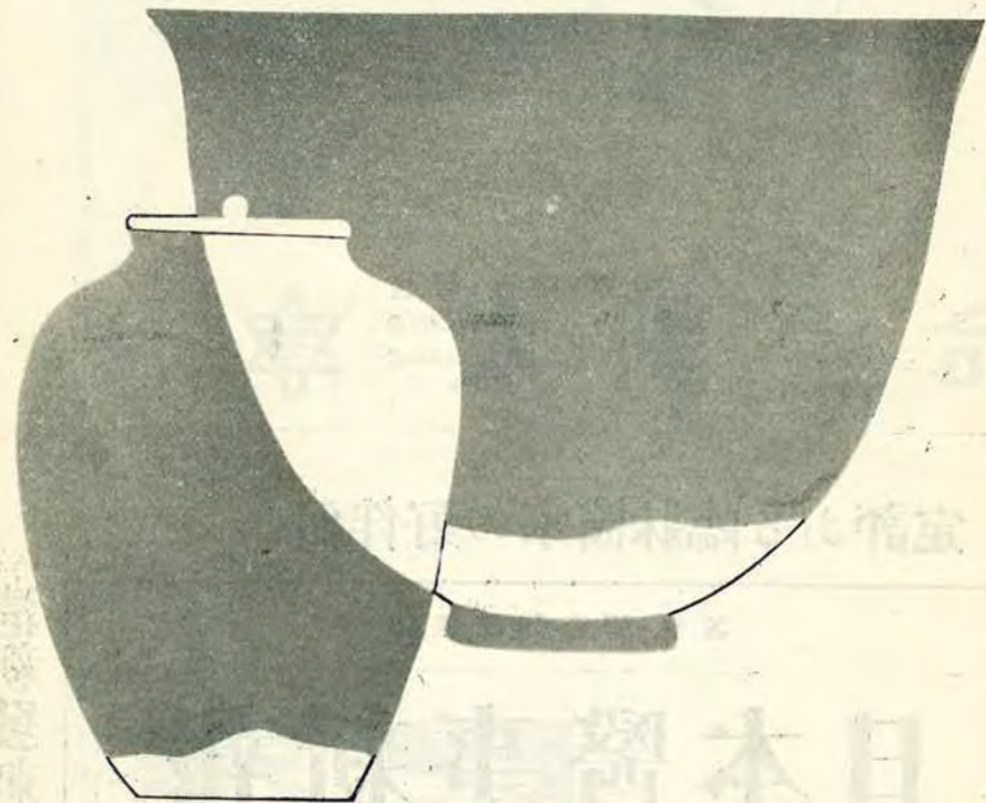


東洋美術館

東京 銀座一丁目
電話 (56) 3033-5858

古美術茶器

常設展觀



赤坂 水戸幸

東京都港区赤坂仲之町三番地
電話 赤坂 (48) 1840 番



海外古美術展

朝鮮・中国・印度
ペルシヤ・ギリシヤ・エジプト

五月一日より

浮世絵展

六月一日より

箱根美術館

強羅公園上下車驛前

東京銀行



The **TŌSETSU** A Monthly Journal
Published by The
JAPAN CERAMIC SOCIETY



安曇出土 服代 大理石 象 Col. Hollis & Co.

古陶磁金石

蘭山龍泉堂

東京都中央区京橋二丁目十一番地
電話京橋(56) 3058・6716